

第3章

新たな公共プロジェクトから生まれた活動、地域・区への影響

1 生まれたプロジェクト

「新たな公共プロジェクト」では、「社会起業アクション・ラーニング講座」のプランづくり及び試行支援、プロジェクト登録、プロジェクト支援による事業構築支援等により、地域課題の解決を図るプロジェクトが3年間で延べ72件生まれ、53件の活動が現在も継続しています。

この中には、「新たな公共プロジェクト」が直接支援していませんが、「社会起業アクション・ラーニング講座」の受講生が講座修了後に、独自に事業を上げた「地域密着民間学童保育ツリー・アンド・ツリー本郷真砂（株式会社ツリー・アンド・ツリー）」等もあります。さらに、地域の居場所「さきちゃんち」「ひとつ屋根の下事業（NPO 法人街 ing 本郷）」等、本プロジェクトのつながりの中で、活動のアイデアや仲間を得て、生まれたプロジェクトもあります。文京映画交流クラブのように、支援していたプロジェクトが自立的・継続的に運営されていく中で、チーム体制が強化され、地域の企業や人材といった地域リソースとのネットワークが広がったことにより、文京映画祭を開催するまでに発展したケースもみられます（詳細は、後述の〔2 事例分析を通じたプロジェクトの成長過程と成長に影響を与えること〕〔3 地域への波及効果〕に記載）。

全体を通して見ると、活動ステージ、活動タイプ、担い手の属性、社会課題のテーマ、地域等多岐にわたっています（図 19、図 20、図 21、図 22、図 23）。規模の大きなプロジェクトばかりではありませんが、区内全域で様々な地域課題に取り組むプロジェクトが生まれ、それぞれネットワーク化していることが、「新たな公共プロジェクト」における担い手創出の大きな特徴であるといえます。

【「新たな公共プロジェクト」より生まれたプロジェクト件数】

支援プロジェクト	9件
登録プロジェクト	16件
「社会起業アクション・ラーニング講座」受講生のプロジェクト	36件
その他プロジェクト	11件

※その他とは、直接支援をしていないが、「新たな公共プロジェクト」のつながりの中で生まれたプロジェクト

○多様な担い手による72のプロジェクトが創出

■地域課題解決プロジェクト（登録・支援プロジェクト）

	区分	プロジェクト名	実施団体
1	平成25年度 支援プロジェクト	地域ブランド「文人郷（ぶんじきょう）」構築による地域連携事業	NPO 法人街 ing 本郷
2		文京映画交流クラブ	文京映画交流クラブ
3		ハッピーファミリープロジェクト	子育て kitchen
4	平成26年度 支援プロジェクト	地域版フューチャーセンター&心地よく暮らし、はたらく Loco-working 拠点「文京版 cococi」立ち上げプロジェクト（cococi2000）	非営利型株式会社 Polaris
5		échelle（エシェル）プロジェクト	échelle
6	平成27年度 支援プロジェクト	blankではなくギャップイヤー！ ～ライフイベントによる長期休暇が キャリア中断にならない文京区をつくる～	NPO 法人 ArrowArrow
7		ぶんきょう・いんぐれす	ぶんきょう・いんぐれす
8		まちのキャッチフレーズ、創って使い倒してずっとつながるプロジェクト	文京かるた隊
9		「ようこそサカミチ in 文京 2023」（減災連携ステークホルダー・ミーテ ィングのモデル化とサカミチ観光開発事業）	本郷いきぬき工房
10	平成25年度 登録プロジェクト	ご近所やさい	ご近所やさい
11		文京アスリート大会	NPO 法人小石川
12		地域密着型介護・保育プロジェクト	株式会社ツリー・アンド・ツリー
13		文の京囲碁交流サロンプロジェクト	文京区囲碁指導者連絡会
14		コミュニティ就労文京プロジェクト	コミュニティ就労文京プロジェ クト実施チーム
15		街の和文家の心・温故知新プロジェクト	keep-kimono-life 文京
16		武道（スポーツ）によるコミュニティ作り	TEAM 空
17	平成26年度 登録プロジェクト	「子育て」を地域で支える「寺小屋キッズ文京」プロジェクト	文京区囲碁指導者連絡会
18		地域コミュニティ情報共有の仕組み創りプロジェクト	TEAM 空
19		地域密着型ミュージックファシリテーター養成プロジェクト	株式会社リリムジカ
20	平成27年度 登録プロジェクト	文京子育てサポートステーション	ひよこ教室
21		頭と心と体を鍛えるダビンチ・キッズ プログラム	ダビンチ・キッズ
22		子ども料理科学教室	NPO 法人市民科学研究室
23		Bーぐる沿線地域のプロモーション組織の設立準備	Bーぐる沿線協議会プロジェク トチーム
24		文の京リージョケーション	文の京リージョケーション
25	文京区の子どもから発信して、地域をつなぐきっかけを作るフリーペー パープロジェクト	うふふ	

図 19 活動ステージ

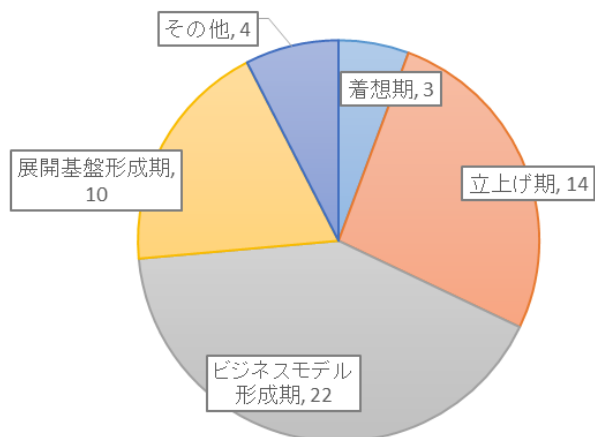
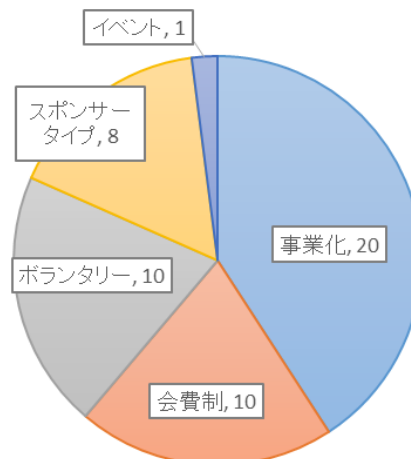


図 20 活動タイプ



■起業アクション・ラーニング講座から生まれたプラン

26	平成25年度	文京社会験学コンテスト	44	平成27年度	Project BAR (文京[Bunkyo]区の空き家[Akiya]) を再生する)	
27		まちの暮らしを喜び・楽しむ「まちのLDK」@小石川	45		「明るく健康に歳を重ねる」～お灸を使ってセルフケア	
28		文京区の再生としての事業	46		小石川植物園サポーターズクラブ	
29		産地と消費者の美味しい関係づくりと商店街の活性化	47		医療費節約 c a f é	
30		シェアすることでつながるコミュニティの場づくり	48		学生や若者の「やりたいこと」を見つける事業	
31		休日のパパのコミュニティをつくる	49		健康古民家 かろう	
32		人の魅力を引き出す地域コーディネーターの育成	50		産官学連携プロジェクトベースラーニング	
33		地域デビュー応援隊…街にタダ住むだけの人の背中を一緒に押しましょ	51		障がい者のための旅行型研修プログラム	
34		思い出ラボ～高齢者の所蔵写真の収集を通じた人と街の記録の蓄積	52		ちいさな町をもっと楽しくするメディア rojiroji	
35		HOLISTIC HEALTH～自然と調和して健やかに生きる	53		町会活動電子支援事業	
36		文京元気まつりプロジェクト	54		アート de わく waork Lab	
37		現役サラリーマンによるアフタースクール「実践塾」	55		文の京再発見環境検定	
38		平成26年度	自然探検 Lab		56	文京ベビ・ナビ
39			通信制高校学習センター		57	やってみよう！はじめてのアート
40			文京アートプロジェクト		58	夜もおもてなし東京
41			BUNKYO TALKER 文の京の地域課題&情報シェアサイト		59	学校や空き家をより活用しやすくなる仕組みは？
42			10代の女の子、20代の女性のハッピープロジェクト		60	文京ブック・カフェ
43			中高年女性のマイライフプラン見直しサポート		61	住まう気分で発信する、あたらしい谷根千

■その他のプロジェクト

	プロジェクト名
62	減災 そなえる東京
63	日曜空手道倶楽部 (TEAM 空)
64	さきちゃんち
65	ひとつ屋根の下事業 (NPO 法人街 ing 本郷)
66	おたがいさま食堂せんごく
67	文京映画祭 (文京映画交流クラブ、小石川ウーマンベース等)
68	JIBUN (Web・地域ニュース・メディア)
69	小石川ウーマンベース
70	ペンと鋏
71	ぶんきょうヘルシーガーデン
72	金融経済リテラシー普及協会

図 21 担い手の属性

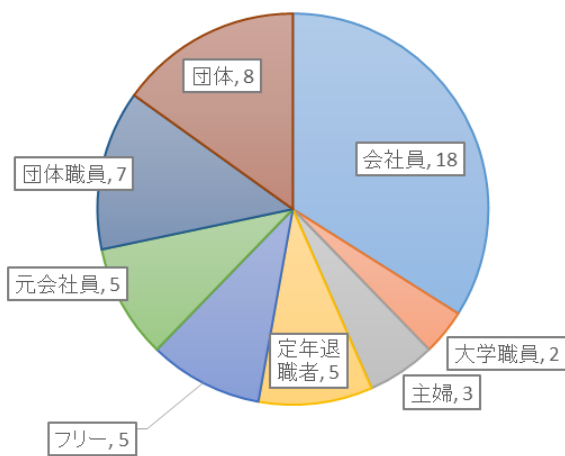


図 22 社会課題のテーマ

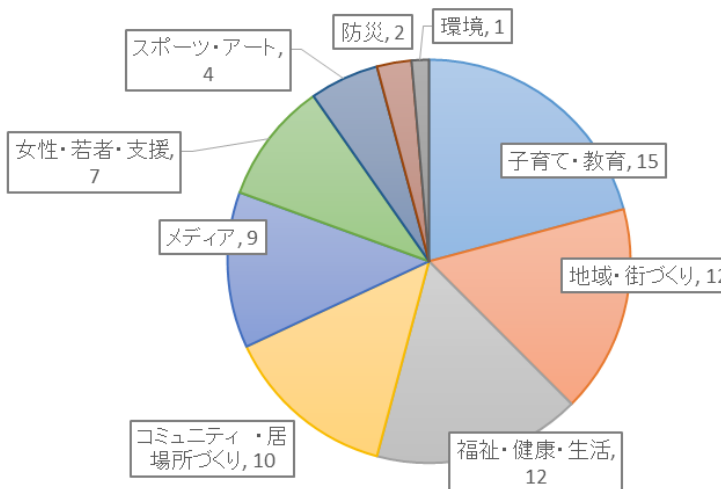
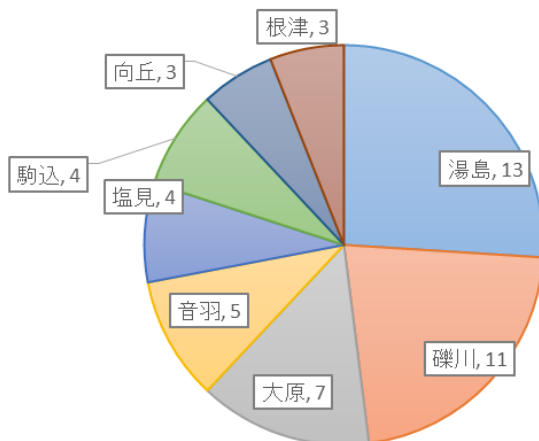


図 23 地域



○今も継続している 53 件の活動¹⁰

■「新たな公共プロジェクト」各種事業への参加者の活動（活動数：39）

- 高校生チャリティ起業体験プログラム「まじプロ」（NPO 法人 Curiosity）
- まちの暮らしを喜び・楽しむ「まちのLDK」@小石川
- HOLISTIC HEALTH ～自然と調和して健やかに生きる～
- 思い出ラボ～高齢者の所蔵写真の収集を通じた人と街の記録の蓄積
- 地域密着民間学童保育ツリー・アンド・ツリー本郷真砂（株式会社ツリー・アンド・ツリー）
- 夜9時までの子育て支援（TEAM 空）
- 文の京圏基交流サロンプロジェクト（文京区圏基指導者連絡会）
- 地域でのスポーツ活動振興（NPO 法人大江戸）
- 子育て kitchen（子育て kitchen）
- 文人郷プロジェクト（NPO 法人街 ing 本郷）
- 文京映画交流クラブ（文京映画交流クラブ）
- 中高年女性のマイライフプラン見直しサポート
- 文京アートプロジェクト
- 文京子育て不動産（文京子育て不動産）
- セルフケアのためのお灸ワークショップ
- BUNNKYO TALKER 文の京の地域課題&情報シェアサイト
- 「子育て」を地域で支える「寺小屋キッズ文京」プロジェクト（文京区圏基指導者連絡会）
- 地域コミュニティ情報共有のためのコミュニティ・チラシ（TEAM 空）
- ブンキョー庶務部（非営利型株式会社 Polaris 文京支部）
- 産官学連携プロジェクトベースラーニング
- 文京ベビ・ナビ
- 文京ブック・カフェ
- 学生や若者の「やりたいこと」からの起業支援
- アート de わく waork Lab～まちあるき&絵手紙教室～
- やってみよう！はじめてのアート ～アートにふれる絵画教室～
- 夜もおもてなし東京 ～住民と訪日客の交流の場～
- 医療費節約 café
- 健康古民家 かのう
- 障がい者のための旅行型研修プログラム
- ちいさな町をもっと楽しくするメディア rojiroji

- 文の京再発見環境検定
- 子ども料理科学教室（NPO 法人市民科学研究室）
- 頭と心と体を鍛える ダビンチ・キッズ プログラム（ダビンチ・キッズ）
- B-ぐる友の会
- 文京区の子どもから発信して、地域をつなぐきっかけを作るフリーペーパープロジェクト（うふ・ふ編集委員会）
- ぶんきょう・いんぐれす（ぶんきょう・いんぐれす）
- まちのキャッチフレーズを使ったカルタづくり（文京かるた隊）
- ようこそサカミチ in 文京 2023（本郷いきぬき工房）
- 減災 そなえる東京

■新たなつながりが広がったことにより、立ち上がった活動（活動数：10）

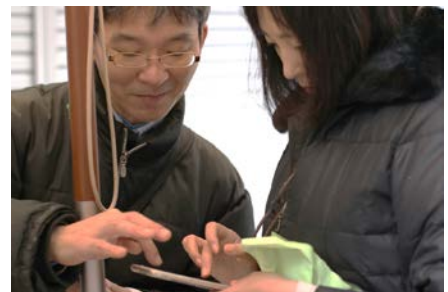
- 日曜空手道倶楽部（TEAM 空）
- さきちゃんち
- ひとつ屋根の下事業（NPO 法人街 ing 本郷）
- おたがいさま食堂せんごく
- 文京映画祭（文京映画交流クラブ、小石川ウーマンベース等）
- JIBUN（Web・地域ニュース・メディア）
- 小石川ウーマンベース
- ペンと鋏
- ぶんきょうヘルシーガーデン
- 金融経済リテラシー普及協会

■他の事業に合流し、継続している活動（活動数：4）

- 自分探検 Lab（自分探検研究所）
- 現役サラリーマンによるアフタースクール「実践塾」
- シェアすることでつながるコミュニティの場づくり
- 地域デビュー応援隊・・・街にタダ住む人だけの人の背中を一緒に押しましよう

¹⁰ 活動名は、一部、現在の活動名で記載。

【「新たな公共プロジェクト担い手」の活動の様子】



2 事例分析を通じたプロジェクトの成長過程と成長に影響を与えること

「新たな公共プロジェクト」から生まれたいくつかのプロジェクトに対して、実践者へのヒアリング及びケース検討を行い、成長の過程とその成長に影響を与えたことをまとめました。また、それぞれのプロジェクトの成果（事業成果、協働成果）についても整理しました。なお、今回、ヒアリングの対象としたプロジェクトは以下の11プロジェクトです。

	プロジェクト名	対象とする地域課題	概要
平成25年度支援プロジェクト	地域ブランド「文人郷（ぶんじんきょう）」構築による地域連携事業 【NPO法人街ing本郷】	地域ブランディング 地域のつながり作り 観光推進	<ul style="list-style-type: none"> 文京区の歴史やゆかりの文人を今の街とつなげることで、若い方や新しい住民にも興味をもってもらえるような仕掛けづくり（文人郷ブランド（キャラクター）、文人郷談議のワークショップの開催等地域の人が実施したいプロジェクトの実現を手伝う。 地域に住む方が地域を誇れる、文人を活用したインナーブランディングを形成する。
	文京映画交流クラブ 【文京映画交流クラブ】	高齢者の引きこもり予防 多世代交流 地域のつながりづくり	<ul style="list-style-type: none"> 映画という誰もが思い出や興味を持つテーマで、ミドル・シニア世代の地域活動参加の第一歩を促す。その際、ひきこもり高齢者予備軍等に声をかける。 上映会だけでなくおしゃべり会をセットにすることで、仲間との交流を楽しめる仕掛けづくりを行う。 映画製作や映画祭の企画・運営を通じて、多世代交流を促進し、地域のつながりを深める。
	ハッピーファミリープロジェクト 【子育て kitchen】	育児ストレスの軽減 子どもと親の自立促進	<ul style="list-style-type: none"> 2歳児などが火や包丁を使う料理をしているのを見守る体験を通して、家庭でも親子での料理づくりを促すようなワークショップを実施する。それにより、親が子どもを見守る力を高め、子どもの自立を促すとともに、子どものできる部分に注目し、任せることができるようになることで、子育てストレスを軽減する。
平成26年度支援プロジェクト	地域版フューチャーセンター&心地よく暮らし、はたらく Loco-working 拠点 「文京版 cococi」立ち上げプロジェクト (cococi2000) 【ブンキョー庶務部（非営利型株式会社 Polaris）】	女性の就業支援・自立支援 地域の暮らしのネットワークづくり	<ul style="list-style-type: none"> 育児と家庭を大切にしながら、共に仕事をする母親の地域コミュニティをつくることで、仕事を軸にした地域内での関係をつくる。それによって、育児中の女性が、仕事か家庭かという選択ではない、地域に根付いた新しい働き方を実現する。また、コミュニティが具体化すると、若い子育て世代が地域に目を向け、地域で暮らす自覚を促す。
平成27年度支援プロジェクト	まちのキャッチフレーズ、創って使い倒してずっとつながるプロジェクト【文京かるた隊】	地域のつながりづくり 地域資源発掘・情報発信	<ul style="list-style-type: none"> 文京区の地域の資源（地域の活動、資源、人）をテーマにした「かるた」づくりを通して、資源を見える化し、多世代で楽しみながら地域を知るきっかけを広げる。 かるた製作のプロセス自体を住民参加型にする。かるたの読み札・取り札と Web を連動した情報提供の仕組み等、地域と住民の多様な接点をつくる。

平成27年度 支援プロジェクト	ぶんきょう・いんぐれす 【ぶんきょう・いんぐれす】	地域活性化 商店街振興 観光推進	<ul style="list-style-type: none"> ・位置情報を活かした携帯ゲーム「イングレス」を楽しむ国内外の多数の方たちが文京区を訪問し、地域のことを知り、地域の方と交流する機会を広げる。そのためのオンラインサイトに加えて、地域の受け入れを促すために、地域住民の理解や協力を得るための地域との関係性づくりを行う。 ・従来の地域の苦手なオンライン・ネットワーク等新しいものを活かした地域活性化の方策をつくる。
	「ようこそサカミチ in 文京2023」(減災連携ステークホルダー・ミーティングのモデル化とサカミチ観光開発事業)【本郷いきぬき工房】	防災 障害者支援 ソーシャルインクルージョン ¹¹ (社会的包摂)の推進 観光推進	<ul style="list-style-type: none"> ・大規模災害時により多くの地域住民が助け合える関係を日常の中で培うためのワークショップや仕組みづくりに取り組む。日常の中で、文京区の地域資源である坂道を観光資源として活用する取組を行うことで、非日常の災害への備えとなる関係性や防災マインドを育むことを目指す。 ・坂道の街歩き等を障害者の方と一緒にすることで、防災について考えるとともに、ソーシャルインクルージョン(社会的包摂)を自然に推進する。
登録プロジェクト	地域密着型介護・保育プロジェクト 【株式会社ツリー・アンド・ツリー】	セカンドキャリアの形成 子育て支援 世代間交流	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども達が地域の様々な世代の方々と交流しながら放課後を過ごせるような民間学童保育を実施する。 ・子どもたちが近隣の高齢者、大人、学生たちと交流することで、地域のつながりを生み出す。 ・地域の高齢者にとって自分たちを活かす社会参加の機会を広げ、介護予防にもつながる。
	武道(スポーツ)によるコミュニティ作り (夜9時までの子育て支援)【TEAM 空】	共働き世帯への子育て支援 女性の就労支援	<ul style="list-style-type: none"> ・空手教室とコミュニティカフェを連動し、夜9時までの子どもの居場所をつくることで、共働き世帯の負担感軽減を応援する。 ・地域密着で行うことで、子ども同士や子どもと地域の大人のつながりもでき、地域で見守りながら子育てをする環境を実現する。
その他	社会験学コンテスト (高校生向け起業体験プログラム「まじプロ」) 【NPO 法人キュリオシティ】	キャリア教育	<ul style="list-style-type: none"> ・高校生たちが期間限定の起業体験プログラムを提供し、高校生たちの主体性や自立を促すとともに、地域や社会問題へ目を広げ、これからの社会を生きる力を身につくようにする。 ・プログラムの企画・運営に地域の大人たちや大学生も参加することで、多世代の交流を促す。
	まちの暮らしを喜び・楽しむ「まちのLDK」@小石川【さきちゃんち運営】	地域の居場所づくり 多世代交流 子育て支援	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の子どもの居場所となり、子どもを中心に大人たちもつながっていく空間を、地域の空き家や人材、コンテンツ等の資源を活かして実現する。 ・定常的な地域の居場所を開くことによって、子どもたちの心の寄りどころとなり、また、トラブルや課題の早期発見にもつながる。

¹¹ すべての人を孤独や孤立、排除や摩擦から援護し、社会の構成員として助け合って生きていこうという考え方。

<平成 25 年度支援プロジェクト>

地域ブランド「文人郷（ぶんじんきょう）」

構築による地域連携事業

（NPO 法人 街 ing 本郷）



【プロジェクト概要】

本郷ゆかりの文人を活用した地域ブランディングと、新住民と旧住民をつなげる場の運営を軸に活動を展開しました。従来から展開していた文人ブランドのグッズ開発やイベントに加え、活動の基盤となる会員制度事業を検討し、定期的な文人郷談議の開催により、文京区の歴史と今の街をつなげ、街と歴史を知る場を提供しました。現在では、文人に関連した地域の新しい活動を始めたい人のつながりづくりを進め、絵葉書制作等のプロジェクトも展開しています。

【社会課題】

文京区は、多くの文人が暮らした街であり、ゆかりの地や建物が数多くあります。また、地域の古い歴史を知る住民がいるにも関わらず、文人のことがあまり区内外の人に知られておらず、ブランディングや街づくりに十分活かされていないのが現状です。また、地域に新しく転入してきた人が増えているにも関わらず、その人たちが地域を知り、地域に入るきっかけがなく、新住民と旧住民との交流もあまりない状態です。

【実施者（長谷川大氏、杉本和歳氏）の思い】

代表は地域の商店街の 3 代目店主で、町会や商店街組合、地域の人たちのつながりから地域の課題対応力を向上させることを目的に、NPO 法人 街 ing 本郷を立ち上げました。地域の資源である「文人」をきっかけに、文人に関わる地域内外の人が集い、地域のイベントを盛り上げ、地域間交流を促すことで、文京区の魅力を伝えていくとともに、住民同士のつながりをつくりたいと考えています。

【活動の成長プロセス】

1. 〔はじまり〕「文人」という街の性格を強めるキャラクターとして活かしたい！

本郷地区には、20 人以上の近代を代表する文人が住んでいた歴史があり、全国でこれほど多くの文人が集まった街は、他に例を見ません。そこで、文人を街の性格を強めるキャラクターにできないかと考え、文人を活かした地域ブランディングの構想を立てました。そこで、文人キャラクターの和菓子製作や講演、商店街イベントへの出展等の活動を始めました。そこから、文人シールを使った地域マーケティングや、区外の文人ゆかりの地（津和野等）と文人郷協定を結んで双方の地域を活性化する等、新しい地域ブランディングの仕組みづくりに挑みたいと考え、プロジェクト支援に応募しました。

2. 〔プロジェクト支援①〕まず、地元の文京区民にとっての「文人郷」の意味を明確にしよう！

文人郷で地域ブランディングを進めるには、何のために、どのようなステップで進めるべきか事務局を交えて議論を重ねました。ブランディングの専門家とのメンターミーティングから「インナーブランディング」というキーワードを得たことで、外部への情報発信ではなく、文京区民が誇りと思える文人郷ブランドになるべく、地域住民に向けた情報発信や仕掛けが必要と考えるようになりました。特に、新しい住民や若い世代の人に、文人を通して地域とつながるきっかけにしてもらえるよう方向性を決めました。

3. 〔プロジェクト支援②〕関心ある地域の人たちとのつながりをつくるのが大切！

プロジェクトの課題の一つは、運営体制の弱さでした。体制づくりは協力者を増やすことが第一歩です。そこで、文人郷プロジェクトに関心を持つ人が一同に会する、文人郷会議（ステークホルダー・ミーティング）を地元の銭湯の菊水湯で開催しました。シンポジウム、街歩き、企画会議をセットとしたステークホルダー・ミーティングは、30 名を超える盛況となりました。このことより、文人を始めとする地域資源を活かした活動に関心のある人が多いことがわかり、地域の歴史に詳しい方等の存在の大切さも再認識できました。これらのことを通じて、文人等の地域資源を活かした活動に興味ある人たちと連携していくという方向性が明確になりました。

実際に、「社会起業フェスタ」において、文人郷プロジェクトを発表したところ、地域での活動を考えていた人々が加わることになり、その人たちが、NPO 法人 街 ing 本郷の「ひとつ屋根の下事業」等新しいプロジェクトの中核メンバーとして活躍することになりました。

プロジェクト支援の成果としては、会員制度の基盤づくりと、文人中心ではなく、文人に関連する地域の魅力や地域で活動する人たちの顔が見えるパンフレット「歴史ある街本郷の暮らし」等があります。

4. 〔プロジェクト支援後の活動〕文人郷談議、地域交流等を継続的に実施

文人を通じた地域のつながりづくりを目指し、地域に古くから住む人が新しい住民や若い世代の人に本郷地区の近現代史を語る「文人郷談議」や、文人に関心のある人たちの交流を促す「文人郷カフェ」等の活動を行っています。また、本郷にある創造型学習塾 a. school で、小中学生向けに本郷の文人レクチャーを行ったり、地域のイラストレーターと組んだ「本郷菊坂 街あるき & 風景絵てがみ講座」等を行っています。

5. 〔多様な活動への展開〕街を舞台にした活動や担い手のネットワークの広がり

文人郷プロジェクトを通して、NPO 法人街 ing 本郷は地域で活動したい人と地域を結ぶための団体であることが再確認でき、その後、地域に持ち込まれたアイデアを形にしたプロジェクトが生まれるきっかけとなりました。現在も、定期的に、活動のアイデアを持つ人が参加できる企画会議を開催しています。

また、プロジェクト支援をきっかけに、文京区社会福祉協議会の会議に参加したり、デザイナーが中間支援施設「フミコム」のデザインを担当したりする等、本郷地区以外にもネットワークが広がっています。

【協働成果～実施者の声より】

1. 新たな公共プロジェクト支援 ※支援期間 平成 25 年 8 月～平成 26 年 3 月

○課題の再設定

「文人郷プロジェクト」の次の打ち手に迷っていた時に、改めてその意味や役割を考える機会となりました。

○協働の担い手としての成長

支援プロジェクトの仕組みが限られた期間の中で成果を出すというものでした。そのことはプレッシャーでもありましたが、逆に期限があるからこそ、自分の中で考えることができ、事業基盤を固める意味では、この方法が必要であったと思います。また、個人的にも、プロジェクトを実施していくための「技術」や「知識」が身に付いたと思います。

○地域資源とのつながり

- ・支援プロジェクトとなったことで、新たな公共プロジェクトに関わった人（社会起業アクション・ラーニング講座修了生）や、各イベント等で出会った人が、NPO 法人街 ing 本郷の活動に参加することが多くなり、様々な事業が展開できるようになりました。地域には、地域課題解決に対して思いの強い人もいれば、お手伝いをしたいという人もいます。色々なベクトルの方向や長さの人がいて、それらをつなげて実現化に向かわせたのが新たな公共プロジェクトの意味だったと思います。
- ・文京区社会福祉協議会等他の機関とつながり、プロジェクトが実施できるようになったのも、新たな公共プロジェクトがきっかけでした。色々な人のつながりがネットワークとして広がるのを感じます。

2. 地域コミュニティとの関わり

- ・地域の語り部の人等、地域の人的資源を、新しい世代や地域の人につなぐことでプロジェクトを進めていくことができたと思います。
- ・NPO 法人街 ing 本郷の活動では、本郷に東京大学があることから、多くの学生が参加しています。文京区だからこそ成り立つことがあると考えます。さらに、文人郷のプロジェクトでは、どうしても年長者の人とのつながりが多くなりますが、今後は、若い人が地域とつながりながら、地域のことを語れるような場の設計もしてみたいと思っています。

【事業成果（アウトプット）】

- ・Web サイト、パンフレット、Facebook ページによる地域資源の区内外への情報発信の充実
- ・文人郷談議等のワークショップ実施（7回）
- ・文人郷活動の参加者数 延べ 205 人（集計のみ）

【地域への成果（アウトカム）】

- ・地域住民が、文人郷談議等を通して、地域の歴史を知り、地域の魅力を再確認できました。
- ・「絵葉書製作プロジェクト」等地域の歴史を資源として活かす活動が始まりました。
- ・文人に限らず、本郷地区で新しいことを始めたい人にとって、NPO 法人街 ing 本郷という相談先が明確になりました。
- ・NPO 法人街 ing 本郷のネットワークが充実しました。
- ・担い手が中間支援施設「フミコム」のデザインを担当しました。



<平成 25 年度支援プロジェクト>
ハッピーファミリープロジェクト
(子育て kitchen)



【プロジェクト概要】

2歳児などの子どもが火や包丁を扱う料理を行うことを、親子で体験することによって、子どものしたい気持ちを大切にしながら、親が見守る力を高めることを目的に、家庭で親子と一緒に料理をできるようになるワークショップを白山で実施しています。「うちの子どもは、まだできない」から「できることがいっぱいある」「子どもに手伝ってもらおう」へと親の認識が変わることを通して、子育てのストレス軽減、子どもと親の自立促進を目指しています。

【社会課題】

核家族化の影響や、初めての育児、パートナーからのサポートが少ない等の理由から、育児で孤独を感じたり自信が持てない母親が増えています。そのようなストレスを相談できる方が周りにいないため、精神的に追い詰められる母親が増えています。子育て支援には多くの情報がありますが、情報過多となり、自分自身の生活にどう活かせばよいか、迷っている人もいます。

【実施者（田中由美子氏）の思い】

プロジェクト実施者が4人の子どもを育てた経験を社会に還元することで、若い母親たちの育児ストレスを軽減し、それが原因となって起こる虐待等の負の連鎖をなくしたいという思いがあります。また、経験から子どもに手伝ってもらいながら家事をすることで、自分の負担が軽減すると感じていましたが、それは周りの若い母親には実現しづらいものだと感じていました。

【活動の成長プロセス】

1. 【着想】自分の経験を活かし、子育てで悩むお母さんたちを応援したい

平成24年度の社会起業家育成アクションラーニング・プログラムに参加し、自分の子育て経験を活かした事業プランを考えました。若い母親が、子育てによって精神的に追い詰められる状況があるという課題に対して、自分の経験から、親子で料理をすることが変化を生むはずという考えをまとめました。「やりたいことが具体的に決まっているならアクションを」という周りの声の後押しとなり、実際に、子どもが主役の料理教室を試行しました。それによって、事業の核が明確になるとともに、「やってみないとわからないことが多い」と考えるようになりました。

2. 【立ち上げ】自宅を使って定期的に教室を開催。続けることで意味あることを確信

講座終了後は、近隣の知人たちに声をかけ、自宅を使って親子の料理教室を定期的に開催しました。実際に料理教室に参加した親子の表情が変化の様子を見て、自分が考えていることに意味があると確信を持つようになりました。同時に、1回では変化しきれないことや料金・コース設定等の事業化に向けた課題が見えてきました。また、定期的に運営する中で、友人たちの中からスタッフとして関わる方が出てきました。自分たちの取組の意味を活かしながら、事業力を高めるために、プロジェクト支援に応募しました。

3. 【プロジェクト支援①】2ヶ月かけて事業の意義を言語化 ～「見守り」というキーワードの発見

平成25年度のプロジェクト支援の審査時や最初のメンターミーティングで、一般の子ども向け料理教室との違いがわからないと指摘される等、新しい試みのため、自分の体験から感じている意義が伝わらないもどかしさを感じました。行政等の外部機関と連携するためには、自分の思いに加え、誰を対象として、なぜ、どのような効果が生じるのかを明確にする必要があるという指摘も受け、伝えたい事業の意義を言語化することに取り組みました。何度も事務局とのミーティングを行い、事業を多面的に検討していく中で、参加者の「子どもが火や包丁を使うと手を出したくなる。子育てkitchenで見守り方が変わった」という言葉から、「親が助ける」から「子どもがするのを見守る」への転換を促しているのがユニークな点であることがわかりました。そのことが対象者の意識や行動の変化につながっていると整理でき、事業の意義を明確にまとめることができました。

4. 【プロジェクト支援②】アンケート、シンポジウム開催、事業モデルの整理で事業の基盤をつくる

事業の軸が定まったことで、事業化の基盤が固まりました。事業の必要性を裏打ちするために就学前・小学校児童の親を対象にしたアンケート調査や、地域の人の認知度を高める子育てシンポジウムの開催、親の体験を軸に考えた4回セットのプログラム構成、キャッチフレーズとチラシの作成等、事業の基盤づくりに取り組みました。また、「社会起業フェスタ」で地域内の認知度を高めました。

5. 〔支援後の事業展開〕白山に事務所を構え、本格的に事業化を推進

支援後、教室の回数を重ねることで、2・3歳児のための“はじめのいっぽコース”を4回セットで2万円とし、3組で実施する事業モデルを軸に、事業を継続しました。平成26年夏には、自宅から白山に借りたスペースで本格的に事業化に取り組むようになりました。その後も、区の支援による中小企業診断士への相談等により、事業づくりを進めました。さらに、今後は、これまでの経験を心理学等から体系的に裏打ちするとともに、担い手やスタッフを育成することで事業を広げていきたいと考えています。そのための法人化も検討しています。

【協働成果～実施者の声より】

1. 新たな公共プロジェクト支援 ※支援期間 平成25年12月～平成26年7月

○課題の再設定

- ・プロジェクト審査、メンターミーティング、「社会起業フェスタ」等、第三者に事業を伝える機会が多く、何を伝えるにも伝え方が大事だと分かりました。また、プロジェクト支援では、事務局と一緒に事業について考えたことが、一番大きかったと思います。自分たちの考えを整理し、意味づけを考えること、子育て kitchen の社会的な意味を言語化することに時間がかかりましたが、これがきっかけとなり事業が飛躍しました。

○協働の担い手としての成長

- ・「支援本部」の委員からの「いいものは料金をもらわないといけない」というアドバイスは、事業を組み立てる際によりどころになりました。
- ・支援期間中にシンポジウムを実施しましたが、実際にイベントを自分で実施することで、周囲の人から協力を得る方法もわかり、その後の活動に活かしています。

2. 地域コミュニティとの関わり

- ・もともと主宰していた子育てサークル等既存の参加コミュニティのメンバーがいたことで、立上げ時に協力してもらえたり、口コミで人が来てくれたり等、事業を立上げる上で助けてもらうことができました。
- ・事業を始めてみると想定外のことも多く、初めてわかることがたくさんありました。その試行錯誤を続けたことがよかったと思います。

【事業成果（アウトプット）】

- ・「2・3歳児のためのはじめのいっぽコース」等、料理ワークショップを実施し、区内外の利用者が拡大しています。

	実施回数	参加者数
平成25年度	20回	65人
平成26年度	45回	209人
平成27年度	125回	718人

- ・全国紙の記事になる等ユニークな子育て支援の取組として、メディアで取り上げられています。



【地域への成果（アウトカム）】

<利用者の声より>

- ・肩の力が抜けて、子育てを楽しめるようになりました。
- ・料理だけでなく、家事全般もイライラすることなく子どもと一緒にできるように（しかも戦力に）なりました。
- ・食が細い子どもでも、自分で作ると本当によく食べるし、スーパーでもお菓子から食材に興味を持ち始めました。好き嫌いが減ったことも嬉しいことです。



<平成 25 年度支援プロジェクト>
文京映画交流クラブ
(文京映画交流クラブ)



【プロジェクト概要】

地域のミドル・シニアを対象に、映画を見た後に“おしゃべりの会”を行う「映画＋対話」型の映画鑑賞会を区内各所で定期的に開催しています。これにより、地域との接点の少ない高齢者や、引きこもりがちになっている人が地域に参加をするきっかけづくりを行っています。また、子どもを対象とした映画上映会も実施する等、多世代が参加するプロジェクトも展開しています。この活動を基盤に、平成 28 年 3 月には、「文京映画祭」を開催し、映画を活用した地域の活性化、つながりづくりを推進しています。

【社会課題】

地域のつながりが希薄となる中で、高齢者の中にも町会に参加しない等地域との接点を持っていない人が増えています。特に、男性の一人暮らしや高齢者等は、地域に知人がいないことで、健康でも外出の減る人が少なくありません。このような「引きこもり予備軍」の人たちには、民生委員や行政もアプローチしにくい状況にあります。

【実施者（城石武明氏）の思い】

プロジェクト実施者は、NPO 法人シニアジョブの提唱する「半遊・半働」という考えに感銘を受け、自分も地域に貢献をしたいと思っていました。その中で、自分も周りの人も好きな「映画」に注目しました。映画をただ観るだけでなく、人と人がつながり、仲間づくりの機会とすることで、文京区を楽しく住みやすい街にできると考えています。

【活動の成長プロセス】

1. 〔着想〕地域の講座に参加する中で、「映画」を活かした地域づくりを発想する

実施者は、退職後、地域貢献をするためには、地域の人の悩みを知る必要があると思い、文京区の開催する各種講座に参加しました。そこで地域の人の声を聞き、対話の場等を体験することを通して、活動のイメージを固めていきました。最初は、文京区で FM 放送を開設したいと考えていましたが、法的に難しいことを知り、初めての人でもフランクに話せ、話題にしやすい「映画」を地域づくりに役立てようと考えました。

2. 〔立ち上げ〕映画鑑賞会を実施。映画&おしゃべりの方向性を確信

平成 24 年度の文京区ミドル・シニア講座の受講生仲間と、アカデミー文京の所有映画や施設を活用して、定期的に映画鑑賞会を実施しました。目的は、映画鑑賞に加え、人と人とのつながりづくりでもあるため、毎回の映画上映後に“おしゃべりの会”を行ったところ、その効果が高いことに手応えを感じました。また、地域活動に参加してこなかった高齢者が積極的に参加する様子にも、可能性を感じました。その後、上映する映画の幅を広げるために、高齢福祉課から区内にある日活株式会社を紹介してもらい、同社の地域貢献活動（100 周年記念事業）を引き継ぐことを条件にサポートを受けることになりました。

3. 〔プロジェクト支援〕地域での鑑賞会の開催と中核メンバーの充実

アカデミー文京だけでなく、地域にも映画上映の場を広げ、ミドル・シニアの地域への参加を促す仕組みをつくるために、平成 25 年度の支援プロジェクトに応募し、採択されました。運営メンバーを充実させるため、「文京ミ・ラ・イ対話」や「社会起業フェスタ」等のイベントに積極的に参加し、仲間を募っていきました。また、町会と連携した地域密着型の上映会も行い、地域に根付いた活動の型をつくりました。その中で、町会等から「最近外出している姿を見かけないが大丈夫だろうか」と心配している高齢者がいることや、その人たちへの声かけが難しいこと等の地域課題を知り、映画鑑賞会の意義を改めて認識しました。

4. 〔支援後の展開①〕映画鑑賞会を継続することに加えて、多様な世代の仲間を広げる

プロジェクト支援後も、活動を継続し、会員制度の構築等に取り組みました。また、高齢福祉課の支援や自分たちの営業活動によって、会場協力や企業協賛を得て活動を継続しました。支援後も対話等のイベントに参加し、上映会への参加者をスタッフへ誘う等して、スタッフを充実させ、活動の基盤をつくっていきました。新しいスタッフが加わったことで、親子での鑑賞会や、映画を通じて子どもたちの自由研究の手伝い等活動の幅が広がり、それによって、さらに新しいスタッフが増えていきました。また、会場代を 200 円程度徴収する等、安定的に開催していくノウハウも固めていきました。

5. 〔支援後の展開②〕 念願の文京映画祭の開催！

新しく参加した中核スタッフの紹介で、上映会のメンバーに母親世代が増え始め、地域の多世代の交流の場となっていくとともに、文京映画祭の構想が具体化していきました。平成 27 年には、本格的に文京映画祭の実現に向けて活動を開始し、地域の企業や映画の専門家、地域の人たちの協力を得て、平成 28 年 3 月に、目標だった文京映画祭を開催しました。文京映画祭の開催に当たっては、15 名ほどのメンバーが、3 チーム（大人映画、子ども映画、広報）体制で準備しました。また、地域企業からは、会場提供や広報資材の無料印刷、コンテンツ提供等、多くの協力を得ました。さらに、映画制作を通じて子どもたちが地域の活動に主体的に関わる仕組みができていきました。今後も、商店街や町会等と連携し、ボランティア組織で運営しながら、区内各地で映画上映会を定期的に開催していくとともに、文京映画祭も継続して開催していく予定です。

【協働成果～実施者の声より】

1. 新たな公共プロジェクト支援 ※支援期間 平成 25 年 12 月～平成 26 年 3 月

○体制づくり

新たな公共プロジェクトのイベントに参加し、その中で、知り合った人を巻き込みながら、活動の体制づくりを行ってきました。誰よりも多く対話の場等に参加し、それを活用して自身の活動基盤を固めていきました。

○プロセス支援

- ・支援の一環として実施されたメンターミーティングが印象的でした。映画による地域のつながりづくりという事業の発想が、メンターから高い評価を得たことで、自身の活動の方向性が間違っていないという確信と自信につながり、その後の活動を継続していく精神的な礎となりました。
- ・地域での展開に当たり、参加者の人に運営スタッフになってもらうことで、よりつながりが強固になることを実感しており、支援期間中にアドバイスを受けた“地域の多様な人の力を借りた運営の方法”のやり方もわかってきました。

○課題の再設定

民生委員と連携したひきこもりの人を映画上映会に誘う企画は、プライバシーの問題等からうまくいかなかったため、自身の事業のターゲットを、「ひきこもり予備軍」に設定しました。町会や行政も多くの「引きこもり予備軍」となる一人暮らしの人が多くいることに気づき、懸念しています。しかし、なかなかアプローチができていない人に、映画を使って声かけ等をしていくことができると考えるようになりました。

2. 地域コミュニティとの関わり

- ・日活株式会社、文化シャッター株式会社等の地域企業等へ積極的に営業活動をすることで、映画上映会や文京映画祭の会場提供、コンテンツの提供等の協力を得ました。
- ・映画を使った新しい地域の交流の場づくりに町会の協力を得ることができました。一方で、色々な地域で活動を行うに当たって、活動で注意すべき点等もわかってきました。
- ・文京映画祭が成功したこともあり、今後は、企業や大学等多くの区内のステークホルダーからの協力を得ることを模索しています。

【事業成果（アウトプット）】

- ・各地域での映画鑑賞会、文京映画祭の実施
- ・子ども向け映画会や文京映画祭での自主制作映画の準備等、多世代交流の場の実現
- ・スポンサー収入や参加費徴収により、助成金等の援助なしに独自に運営

	映画鑑賞会参加者数
平成 25 年度	16 人
平成 26 年度	756 人
平成 27 年度	1048 人 + 映画祭 487 人



【地域への効果（アウトカム）】

- ・配偶者を亡くし、引きこもりがちだった男性高齢者が映画会をきっかけに、地域に関わるようになる等、高齢者の地域参加が拡大しました。
- ・多世代の団体間の交流機会が充実しました。

<平成 26 年度支援プロジェクト>

地域版フューチャーセンター&心地よく暮らし、
はたらく Loco-working 拠点「文京版 cococi」立
ち上げプロジェクト(cococi2000)



【プロジェクト概要】

子育て中等の制約のある方が、地域の中でワークシェアをすることで、個人の状況に応じた働き方を選択できるようになり、仕事も子育ても充実できる新しいワークスタイルを実施していく取組です。既に世田谷で実施していた仕組みを文京区で展開していくため、ブンキョー庶務部を立ち上げ、地域企業の庶務業務のサポートをする傍ら、子育て中の女性ならではの視点を活かして、地域イベント等の共同企画等も実施し、地域でこちよく暮らし、はたらくとことを推進しています。

【社会課題】

出産を機に退職した女性は、社会とのつながりがなくなっただよに感じる人が少なくありません。自分を活かした仕事をしようとする、会社中心に働くか、フリーランスの道がありますが、仕事中心の生活になりがちです。その結果、仕事か家族を選択することになり、「家庭を犠牲にしてまで働きたくない」という理由で仕事を諦めている女性も少なくありません。

【実施者の思い】

子育て中の女性は、母親として地域でのつながりはありません、それ以外の軸でつながる機会が、あまりありません。子育て期の限られた時間の中で自分を活かすのは、個人では難しくとも、チームをつくり、相互支援ができれば実現できます。それが、仕事を軸につながるコミュニティであれば、母としてだけでなく、一個人として地域や社会との新しい接点を持つことになります。

【活動の成長プロセス】

1. 〔着想〕セタガヤ庶務部で生まれた新しい働き方を各地に広げたい！

非営利型株式会社 Polaris（以下、Polaris という。）は、育児中の女性が地域の中で多様な働きかたを実現するための仕組みを創ることを目指して設立されました。Polaris では「セタガヤ庶務部」を立ち上げ、地域に暮らす社会経験豊富な女性たちが時間と場所の制限を、チームを組んで補い合い、業務を請け負う取組を始めていました。これは、新しいワークスタイルとして、各地から反響を呼んでいたことから、他地域に展開する仕組み（ソーシャルフランチャイズ）を検討していました。そんな時、文京区の新たな公共プロジェクトを知り、文京区を基盤とした他地域での活動を実現するため、プロジェクト支援を活用することにしました。

2. 〔プロジェクト支援①〕活動への関心は高いが、地域に根付く難しさにも直面した

セタガヤ庶務部の取組は文京区でも多く関心を集め、最初のイベントには興味を持つ人が区内外から 40 人程度、集まりました。ただし、初期のイベントの情報が届いていた人たちは、既に活動をしていたり、自分の仕事を持っている人たちが多く、実際にブンキョー庶務部を立ち上げる対象者ではありませんでした。また、仕事の発注者を募るために地元企業向けに説明会を行っても、新しいコンセプトのため、説明会への参加企業はとても少数でした。また、Polaris の活動を初めて知った企業側の人からは、「なぜ新しい働き方が必要なのか」「仕事を頼む際の強みは何かかわかりにくい」といった指摘がありました。

このことから、文京区タイプの営業スタイルを確立しなければならないことがわかりました。いくら他地域で実績があっても、新しい地域で地域の人や企業に根付いた形で活動を立ち上げることの難しさが明らかになってきました。

3. 〔プロジェクト支援②〕対話や地域ネットワークから地域に向き合うことで活路が開けた

地域に根付いた活動を立ち上げるために、対話の場等に参加し、つながりを広げていきました。当初、企業向けの活動をしていましたが、担い手向けに座談会と説明会を実施しました。それと同時に、地域の人たちとの交流を深め、また、チーム作りをする上でお互いの強みと弱みを知ることを目的に茶話会も実施しました。さらに、「社会起業フェスタ」では、セタガヤ庶務部の様子の動画を紹介する等、伝える工夫を進めました。

また、仕事については、いきなり地域の働き手が直接、仕事を受けるのは負担が大きいため、口コミで活動を知った企業や商店街連合会等からの小規模の仕事を、まず Polaris が受け、一部をブンキョー庶務部が担う形で立ち上げました。区外の事業者のため、区内に固有のミーティングスペースがなく、地元企業の会議室を借りる等の工夫も行いました。

このように苦労しながら進む中で、共感が広がり、コンセプトを理解する人や企業が増えていきました。

4. [プロジェクト支援③] 文京区メンバーでブンキョー庶務部を立ち上げる！

働き手のチームが立ち上がり、仕事を通して実際に一緒に働くことで、「ブンキョー庶務部」としての活動が動き始めました。ただし、「仕事を受ける」と「自分たちで活動を立ち上げる」の間にはギャップがありました。また、活動を立ち上げるには、地域メンバー自身が「なぜ行うのか」を落とし込む必要がありました。メンバーの中で、自分がどのように関わるのか、家族とのバランスをどうするのか、戸惑いもありました。そのような中、地域活動の経験豊富なメンターからアドバイスされ、メンバーが「自分たちがします！」と地域に宣言する「お披露目会」を企画しました。支援期間の終了後の平成27年6月に地域の関係者、お世話になった方をお招きし、ブンキョー庶務部の立ち上げを宣言することができました。その会の準備・運営に向けて、文京区のメンバーそれぞれの役割を明確にしていく中で、自分たち自身が立ち上げるんだという意味が固まり、沢山の方が温かく見守ってくださった中で宣言したことは、大きな自信にもつながりました。

5. [支援後の展開] “自分たちのブンキョー庶務部”として活動を展開

お披露目会で、メンバーそれぞれが決意表明をしたことで、文京区メンバーが中心に運営し、Polaris が支援する方法での運営が始まりました。メンバーは「自分たちで仕事を作るのが面白い」という考え方を基に活動をしています。また、ブンキョー庶務部として、仕事を受託するだけでなく、仕事と暮らしを考える座談会等のワークショップ等の活動も展開しています。

【協働成果～実施者の声より】

1. 新たな公共プロジェクト支援 ※支援期間 平成26年8月～平成27年3月

[Polaris メンバー]

○課題の再設定

事務局とのディスカッションを通じて活動の社会的意義や、これまでの活動のノウハウを明確化し、プログラム化を行うことができました。これは、Polaris においても、今後の活動を見直すきっかけとなり、新しいステップへと進むことができました。

○資源連結

当初、文京区に土地勘がなく、「文京ミ・ラ・イ対話」に参加し、地域の雰囲気をつかめたことで、ここで展開するという実感を得ることができました。

[ブンキョー庶務部メンバー]

○協働の担い手としての成長

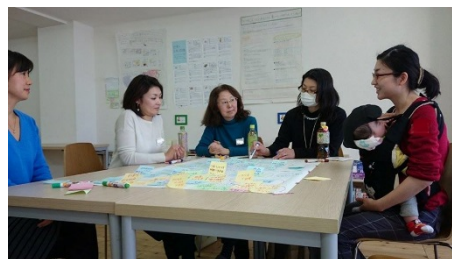
スタッフとしてブンキョー庶務部に登録しましたが、最初は何を目指しているのかよくわかりませんでした。仕事が少しできればよいくらいに思っていたので、色々話をされても、場違いなところに来てしまったというようにも感じていました。しかし、事務局と一緒にお披露目会のためのミーティングをしていく中で、初めて、ブンキョー庶務部の目指すことや、自分たちに何を求められているのかを理解でき、覚悟ができたと思います。自分たちのやるべきことが明確になったことで、与えられたものをやるのではなく、自分たちで仕事をつくっていくのだということがわかり、それが楽しいと思えるようになりました。

2. 地域コミュニティとの関わり

・商店街、地域企業との協働や、地域機関（商工会議所等）との結びつきにより、地域のプロジェクトに参画する等、活動の幅が広がっていきました。

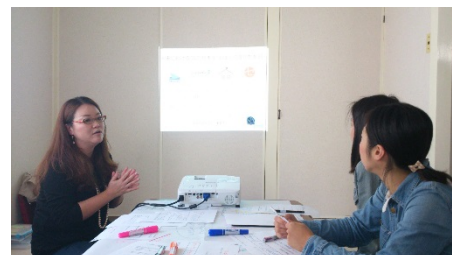
【事業成果（アウトプット）】

- ・ブンキョー庶務部の立上げ・運営区内の企業、商店街連合会等からの受注
- ・イベント・座談会への参加者数
(平成26年度70人、平成27年度約100人)
- ・Facebook いいね数 144
- ・ブンキョー庶務部スタッフ
(登録者数25人、コアメンバー5人 (H27年度末現在))



【地域への効果（アウトカム）】

- ・子育て中の女性たちが、仕事を通して学び合い成長する機会を得て、つながるコミュニティを立ち上げました。
- ・女性の新しい働き方への理解を深める区内企業の拡大につながりました。



<平成 27 年度支援プロジェクト>
ぶんきょういんぐれす
(ぶんきょう・いんぐれす)



【プロジェクト概要】

世界中に多くのプレイヤーがいる位置情報を活かしたオンラインゲーム「イングレス」を活用した地域活性化を目指し、イングレスプレイヤーにとっての地域の魅力を独自に Web 等にまとめた情報発信や、地域の中でイングレス体験会等を実施しています。実施に当たっては、地元のマルシェに「やきいもブースの出店」等を行い、“エージェント”と呼ばれるイングレスプレイヤーと地域との交流を促す工夫をしています。

【社会課題】

地域活性化には、若年層へのアプローチが必要だと言われていますが、これまで効果的な打ち手がないのが現状です。若年層はインターネットや携帯を主な情報源としていますが、商店街や町会の担い手は高齢化しており、新しい技術の活用には積極的ではありません。オンラインの世界と地域との間を「つなぐ人材」が求められています。

【実施者（郷津桂一氏）の思い】

郷津氏は、自分の子どもが家の中でゲームをし、外出する機会が減っていることが気になり、親子で一緒に地域に出て遊べるようなゲームが必要だと考えていました。また、大岩氏は、町会や商店街が、新しい世代に対応できる仕組みがなければ、長期的に弱まってしまおうと考え、効果的な解決方法がないか、探していました。

【活動の成長プロセス】

1. 〔「社会起業アクション・ラーニング講座」での着想〕 子どもの外出を促すような遊びが必要だ！

郷津氏は、「社会起業アクション・ラーニング講座」に参加し、自分の問題意識を整理していく中で、子どもたちが室内でゲームをすることで、外出が減っている状況が気になり、これを何とかしないといけないという思いでプランをまとめました。最初、文京区の名所やお店を舞台としたオリジナルの RPG（ロープレイングゲーム）を作ることを考え、実際に地蔵通り商店街を舞台とする小規模版を作り、試行してみました。しかし、子どもは完成度の低いものには興味を示しません。作ることは楽しくても、会社員をしながらゲームを本格的に作り込むことは難しいと感じていました。

どうしたらいいか考えていたところ、「人々が家の外に出歩く理由を作る」ことが目的のゲーム「イングレス」の存在を知りました。しかも、開発者のハンケ氏は「自分の子どもがもっと外出するように」と考えてゲームを考えたことや、位置情報を活用して地域に実在する名所やお店をスマートフォン上のオンライン空間に反映させ、その陣地取りをするゲームであることを知り、「自分と同じことを考えている人がいる」と強く感銘を受けました。しかも、イングレスはグーグルで開発され、世界中で 1000 万以上のユーザーがいる本格的なゲームです。実際にプレイしてみると、実在の地域とゲームの結びつきが、たいへん面白いと感じました。そこで、自分のゲームよりも、イングレスを活かして文京区の街を楽しむ人を増やし、地元を盛り上げることができると考え始めたのです。

2. 〔「社会起業フェスタ」での出会い〕 オンラインの専門家と地域に古くから住む人が結びつく

平成 27 年の「社会起業フェスタ」で、郷津氏が地域とゲームを結びつけた活性化について発表したところ、商店街の活性化のためのアイデア探しをしていた商店街青年部の大岩氏と出会いました。大岩氏は郷津氏からイングレスを紹介され、実際にプレイしてみて、その面白さに気づき、二人で活動に取り組み始めました。

郷津氏は Web サイトで、ゲーム紹介や、プレイヤー（エージェント）のための文京区の地域情報を発信するとともに、オンラインでエージェントの協力者を募りました。大岩氏は商店街や町会等地域の賛同者や協力者を募る活動を行いました。

3. 〔プロジェクト支援〕

イングレスは地域資源を活かしたオンラインゲームですが、活動の賛同者を集め、オンラインユーザーと地域を結びつけるのは、たいへん難しい要素がありました。地域の人にオンラインゲームの理解を得ることが難しく、エージェント向けの取組を行うことで国内外から多数の人が集まることにイメージを持ってない人、ゲーム愛好家が地域に来ることに懸念する人がいました。一方で、エージェントもゲームを楽しむことが主で、地域活動へ協力したいと考える人は少ないのが現状でした。

イングレスを活かす可能性を考えるために、プロジェクト支援を受け、支援のメンターミーティングでは、誰が対象者で、どのような価値を提供したいか問われる中で、「文京区がエージェントにとって楽しいエリアになるような環境づくりをする」ことが大切だと再確認できました。

また、地域との関係づくりを進めるために体験の機会を広げようと、地域でのインGRESS体験会や、地元のマルシェでエージェントであれば焼き芋の割引販売を行う等の取組を進めていきました。地域でのイベントを通して地域の方のインGRESSに対する理解が深まり、エージェントとの交流のイメージがわくようになっていきました。また、Web でのこまめな情報発信や活動する人の顔が見える情報発信で、エージェントの中から協力者も増えていきました。

4. 〔支援後の展開〕公式イベント「Mission Day」の開催、ポケモンGOへの展開

情報発信や体験会、地域との交流の機会を継続していたことが、インGRESSの運営会社 Niantic の目にとまり、公式イベント「Mission Day」を平成 28 年 7 月 17 日に文京区で開催することになりました。住民に迷惑がかからないように文京区観光協会の設定した街歩きコースを基に Mission Day コースを設定し、エージェントをもてなすイベントを行ったところ、1 日で 3,000 人が文京区を訪れました。また、インGRESSのシステムを応用したポケモンGO がリリースされたことから、親子や子どもが地域で安全に遊びながら、地域の交流を深めるような仕組み作りにも取り組む予定です。

【協働成果～実施者の声より】

1. 新たな公共プロジェクト支援 ※支援期間 平成 27 年 8 月～平成 28 年 3 月

○参加の誘発、プロセス支援

講座で、想いやアイデアを一つのプランにまとめ、アクションしていく中で、「インGRESS」を活用するアイデアが固まりました。その後、どう動くかについては、「社会起業アクション・ラーニング講座」で習ったことを忠実に実行しているだけです。忠実に実行することで、現状の形になっていきました。

○資源連結

地域の方に説明しても理解してもらえないことが続くと、気持ちが折れそうになります。ただ、地域の方とのつながりを通して丁寧に説明していくことで、地域づくりの新しい打ち手として共感してくれる人もいます。地域でイベントを行ったり、それを手伝ってもらったりする中で、地域との関係を築き、協力者も増えてきました。

○地域との接点づくり

これまで仕事ばかりで、地域のことは何も行ってきませんでしたが、毎月マルシェに参加したり、この活動をきっかけに、地元でフラメンコギター教室を開催したり、高齢者施設に慰問に行く等、地元の知り合いが増えるのが純粋に楽しく思えます。

2. 地域コミュニティとの関わり

地道に、地元の商店街の方との関係性をつくってきたことに加え、地縁者（地元商店街の青年会のメンバー）との出会いから、商店街等へ「インGRESS」について何度も紹介する機会を得ました。さらに、そこからマルシェへの出展等も実現し、「インGRESS」についての地域活動の理解・協力が進みました。

【事業成果（アウトプット）】

- ・ 特設サイトにおいて文京区の魅力の情報発信 (<http://ingress-bunkyo.tokyo/6683>)
- ・ インGRESS体験会等イベント参加者数 延べ約 300 人
- ・ 公式イベント「Mission Day」の開催
1 日で文京区内のコースを約 3,000 人が利用



【地域への効果（アウトカム）】

- ・ インGRESSプレイヤーにとって文京区が地域活動の熱心なエリアとして認知度が高まり、それが公式イベントの文京区での開催につながりました。
- ・ ぶんきょう・いんぐれすの活動を知った若者が地域のマルシェ等のイベントの運営に参加し、新しい交流が生まれています。



ぶんきょう・いんぐれす HP より (<http://ingress-bunkyo.tokyo/>)

<平成 27 年度支援プロジェクト>
「ようこそサカミチ in 文京 2023」
(減災連携ステークホルダー・ミーティング
のモデル化とサカミチ観光開発事業)
(本郷いきぬき工房)



【プロジェクト概要】

本郷いきぬき工房は、大災害を「生き抜く文化」と、復興時の「息ぬく居場所」を紡ぐことを目的に、地域防災アクションや、文化交流活動を展開しています。地域が災害に備えるために、専門家を交えた防災を考える住民参加ワークショップや、地域の各種組織と専門家がつながり、産官学民が連携した地域活動を展開する仕組みづくりを推進しています。また、平時から楽しみながら助け合える関係性を構築するための活動として、文京区の地域資源「坂道」をキーワードに、街歩き等を楽しみながら防災意識を高める事業（坂の駅事業）等を行っています。

【社会課題】

首都直下地震への備えの中で、障害者、高齢者や妊産婦等「災害時要援護者」とよばれる、逃げ遅れる可能性の高い人たちに対する救助体制や近隣住民との連携体制は十分ではありません。また、文京区で約 10 万人が帰宅困難者になると言われている中、そのコアとなる企業・中学・高校・大学及び観光施設等、昼間人口への減災連携・合同訓練も必要です。2020 年のオリンピック、パラリンピック開催中の大災害発生に備え、産官学民の連携による、減災・観光・心のバリアフリーの推進が喫緊の課題です。

【実施者（瀬川智子氏）の思い】

阪神大震災直後から被災地神戸で避難所や仮設住宅支援を行った 3 年間の経験から、「最後のひとりに寄り添いたい」という想いを強く抱くようになりました。特に震災発災後 72 時間、生き埋めの人等を助け出すには「その時、その場で居合わせた人と共に」協力し合う共助の心・技術・コミュニティが必要です。文京区内で、災害時に逃げ遅れる可能性の高い人たちと対話する中で、防災意識の向上には、楽しくて、何度でも失敗できて、街の地形や魅力を学べるような、エンターティメント性の高い防災訓練や街歩きが有効なことに気づきました。いつでもどこにいても、誰とでも臨機応変に協力し合い、目の前の人を助ける心技体を鍛えるためにも、対話の場づくりが大切と考えています。

【活動の成長プロセス】

1. 【社会起業アクション・ラーニング講座：着想】心のふるさとである本郷で起業したい！

瀬川氏は、出身地である本郷地区にて起業したいという夢を 10 年前から抱きながらもきっかけがなく躊躇していたところ、「新たな公共プロジェクト」は区外からも参加できることがわかり、講座に申込みました。関東大震災を乗り越えた家に幼少時代に住んでいた経験や、阪神大震災後三年間の復旧復興支援での学び、そして東日本大震災での「心の復興」活動の経験から、大災害をみんなで生き抜くためには、「生き抜き（サバイバル）」の技術と、避難所や仮設住宅での趣味サークル、おちゃっこ広場、思い出の写真の保管など、ホッと安心できる「息抜き（リラクセス）」の場の両輪が重要であることを強く思い「本郷いきぬき工房」という屋号で活動することとしました。

2. 【社会起業アクション・ラーニング講座：立ち上げ】周りの人たちの力を借り、活動の立ち上げる

講座の中での試行的アクションとして、NPO 法人街 ing 本郷や東京大学の学生などの協力を得ながら、消防団のお話を聞く会や、池袋防災館ツアーを実施したところ参加者の反応がよく、個人で自由に参加できる「防災アクション」に手ごたえを感じました。また、「文京ミ・ラ・イ対話」や「社会起業フェスタ」の発表から関心を持つ人と出会うこともできました。さらに、「社会起業アクション・ラーニング講座」受講生の中にいた防災の専門家から加入の申し出があったことから、歴史的建造物愛好家の建築家と 3 人で本格的に「本郷いきぬき工房」を立ち上げ、さらに、個人としても、文京区に U ターンし、活動に取り組むことにしました。

3. 【活動の基盤づくり】ワークショップを通して専門家やステーク・ホルダーとの関係をつくる

講座修了後、文京区社会福祉協議会との連携による災福カフェ（防災に関するゆるやかなつながりをつくる場）や、本郷地区の避難所単位ごとの「首都直下地震 そのときこの街で何が起こるか」の講演会、ワークショップを継続的に開催し、そうした場を通して、文京区にゆかりの深い防災や建築を専門にする大学有識者、町会や消防団などの地域の防災組織、企業や行政の防災担当者などとのネットワークができていきました。また場づくり手法を学ぶために参加した「レジリエンスカフェ」から、大成建設と「文京ソーシャルイノベーション交流会」との合同開催による文京フューチャーセッションを開催し、そこから現在のコアメンバーの加入や、国連世界防災会議での地域での取り組み事例の発表にもつながりました。また、地域の地形、建造物の特徴等により想定される災害リスクを考える会において、有識者の話だけでなく対話をし「不安の共有」や「自分事にする」こと、自分のアクションを考えることで、参加者が次の備えにむけた個々のアクションをしやすくなることや、新しい防災の担い手が生まれやすくなることなどを学びました。

4. 「複合的な活動へ」障害者支援と防災活動の組み合わせへ

活動の中で「災害時要援護者」の支援が行きとどかず、それらが区内で孤立していることに気づきました。どのような支援が必要かを学ぶため、脳性麻痺など重度の障害をもつ方の訪問介助の資格を取得し、在宅介助のアルバイトをはじめました。その中で、首都直下地震の脅威等が障害を持つ方々の生きづらさを助長させるリスクがある、つまり「迷惑をかけるくらいなら、地震とともに死にたい」と思っている人もいることを知り、障害者の方々のための防災訓練には、楽しさと、学びと、出番が重要なことに気づきました。また、NPO法人街ing本郷を通じて、精神障害者施設の方も、地域に何か貢献したいと考えていることを知り、精神障害者施設の方と、重度の身体障害をもつ方々と一緒に根津神社の坂道をみんなで登るツアーを実施しました。その際の「当事者の方々は失敗を極端に心配し、体調に影響する」とのアドバイスをきっかけに、「何度でも失敗できる」「挑戦する心が何よりの宝物」なことを伝え、ゆるくて、楽しい、街歩きからはじめることの大切さを認識しました。さらに、東京パラリンピックについて考えるフューチャーセッションや「障害者の防災」に特化した連続講座も開催しました。これらの活動を通じ、視覚・聴覚・肢体・精神の障害をお持ちの当事者団体・支援団体の方々と連携・連帯の輪が広がりました。

5. 「プロジェクト支援：モデル整備」自分たちのノウハウとスキームを整理し、継続的な事業の展開へ

行政との協働を深め、プロジェクトの事業展開の基盤を整えるため、プロジェクト支援を受けました。その中で、第三者に対して活動の特長を伝えるためのノウハウとスキームの整理を行いました。また、これまでの取組を整理することで、「専門家の話や訓練だけでなく、違う視点を持つ人との対話や体験を通して、自らの気づきを大切にすることで当事者意識や主体性を高め、アクションにつなげる」「防災×ユニバーサル×観光の組み合わせによって、日常の中で楽しみながら災害に備えるつながりをつくる」といったモデルがまとまりました。それを踏まえ「坂の駅事業」を試行し、構想を固めました。これは、文京区の地域資源でありながら、災害時要援護者のハードルにもなりうる「坂道」を活かし、観光しながら防災について学ぶユニバーサル街歩きなどを推進することで、災害前のつながり、災害時の助け合い、災害後の復興へのつながりを生み出すものです。今後は、昼間人口を抱える商業施設や大学、企業、地域、専門家によるステーク・ホルダー会議も進めながら、地域住民参加ワークショップ、「坂の駅事業」の普及と定着などのプログラムの充実を図り、「人は誰でも、誰かを救うことができる」をコンセプトに事業力を高める取り組みを進めています。

【協働成果】

1. 新たな公共プロジェクト支援 ※支援期間（登録：平成26年度、支援：平成27年8月～平成28年3月）

○プロセス支援

- ・新たな公共プロジェクトの講座を通して、将来は文京区本郷で起業したい、という心の奥にあった思いを「生き抜き防災」「息抜き観光・文化資源の発掘」という具体的なプランにすることができました。
- ・「文京ミ・ラ・イ対話」や「社会起業フェスタ」での発表までというように、その時々「アクション」をする必要があったため、それが地域とのネットワーク化や、事業化のきっかけとなりました。

○資源連結

- ・講座や文京ミ・ラ・イ対話の場で、区役所や町会、障害者団体等、地域防災のステーク・ホルダー達とフランクに対話でき、地域ニーズや連携モデルがイメージしやすくなりました。新たな公共プロジェクトのつながりで、文京区社会福祉協議会とも接点ができ、災福カフェなどのいきぬきプラットフォームの形成や助成金取得を通じて、多様な障害者団体やDMAT（災害時派遣医療チーム）、救命救助の専門家の方々とつながることができました。

○課題の再設定／協働の場の構築と運営制度の設計

- ・事務局とのディスカッションを通して、防災を軸に多様な取組をしてきた自分たちの活動の意味を再定義することができました。自分たちが直接的に取り組んだことだけでなく、波及効果（アウトカム）を考えることで意義を整理できることもわかりました。

2. 地域コミュニティとの関わり

- ・私達の防災アクションは、防災や救命救助等の専門家・学識経験者の方と、地域で防災を担う役割の町会等の方々、障害者・子育て世代・高齢者等、助けを必要とする地域住民の方々が、ともに出会い・学べる場となることを心がけています。また、地元の大学の研究室との共同研究に参加することで、学生、先生、我々当事者が共に新しい社会実験に取り組む喜びもあり、また、国際学会でも論文として採択されるなど本プロジェクトが、ソーシャルイノベーションの先進事例として評価を得ることもできました。

【事業成果（アウトプット）】

- ・防災や減災ワークショップ、担い手の育成事業の実施
- ・平成27年度 イベント回数23回
（「坂の駅」プロジェクト7回、障害者防災6回、防災を考える会（町会、福祉避難所等）3回）
- ・ワークショップ、勉強会等の参加者数
平成25年度126人、平成26年度351人
平成27年度551人

【地域への効果（アウトカム）】

- ・防災や減災について、つながっていなかった地域と専門家、企業、活動者らを結び付けることで、継続的に話し合う関係が生まれました。
- ・身近に防災について対話する機会が増えたことで、災害対策に主体的に取り組むマンション等が増えました。
- ・障害者と防災は切り離されがちで、障害者が取り残される不安がありましたが、自分たちも地域の一員として貢献できるという社会的包摂を実現しました。

<平成 27 年度支援プロジェクト>

まちのキャッチフレーズ、創って使い倒して ずっとつながるプロジェクト (文京かるた隊)



【プロジェクト概要】

地域の様々な活動や地域資源を、かるたによって「見える化」し、地域の人に知ってもらうことで、地域のつながりづくりの一助としてもらうことを目的としています。対象となる団体等取材して、読み札、取り札を作成し、さらに詳しい情報を Web で紹介する等、かるたを通じて情報発信するという一連の製作ノウハウを確立しています。また、製作したかるたの活用についても検討しており、それを活用した地域のつながりや場をつくる「かるたファシリテーター」の育成も行う予定です。

【社会課題】

地域には、古くから住む旧住民とマンション等に転居してきた新住民がおり、その接点が少ないことが課題となっています。またそれぞれにコミュニティを持っていても、そのコミュニティ同士が交わるきっかけや知り合えるきっかけが少ないことで、住民が「つながりがない」と感じる状況を引き起こしています。

【実施者（都丸光子氏）の思い】

会社員時代に地域とつながっていなかったこともあり、地域のつながりが少ないことを懸念しています。群馬県出身であり、群馬では「上毛かるた」が地域のことを知り、愛着をもつツールとなっているため、文京区でも地域を知り、地域への愛着を育み、つながるツールとしてかるたが活用できると考えています。

【活動成長のプロセス】

1. 〔社会起業アクション・ラーニング講座：着想〕「かるた」で地域のつながりを！

勤務先を退職した後に、家庭以外の社会とのつながりを求めていたところ、文京区の地域貢献講座や社会起業講座のことを知り、参加するようになりました。そこで地域課題について話し合っていく中で、文京区の地域のつながりの弱さを多くの人が課題と感じていることがわかりました。地域へのつながりや愛着を考えた時に思い浮かんだのが「上毛かるた」でした。東京に来て、群馬県出身者同士が出会うと「上毛かるた」で盛り上がるのが多く、かるたという共通体験が地域のつながりやコミュニケーションの活性化に役立つと感じていました。そこで、文京区版の地域かるたをつくることで、つながりを作りたいと考えようになりました。

2. 〔立ち上げ〕文京かるた隊を立ち上げ、地域でワークショップを行う

地域貢献講座での対話ワークショップ実践体験を活かし、その時に出会った仲間に、講座後も継続できる活動として「かるた」を使ったワークショップを提案し、仲間と「文京かるた隊」を立ち上げました。子どものためのイベント、学童保育での数字かるた、「こまじいのうち」でのかるた会等の活動を行っていきました。また、空きスペースを人がつながる場として活用する「ダイアログスペース」も試行しました。さらに、「社会起業アクション・ラーニング講座」で地域課題の解決を目指す方たちとつながり、地域とのネットワークが広がっていきました。

3. 〔「プロジェクト登録」：活動の深化〕文京区版かるたをどう作るのか試行錯誤を続ける

文京かるた隊で様々なワークショップを行う一方、「上毛かるたの文京区版をつくりたい」という思いは継続していました。ただ、上毛かるたは戦後すぐに作られ、現在は全ての小学校が取り扱い、県大会も開催されるほど地域に根付いています。それを文京区でそのまま行うことはできません。そのため、平成 26 年度に「プロジェクト登録」にエントリーし、文京区に必要なかるたは何か、区民がかるたに関心を持つためにはどうしたらよいか、学校で利用してもらうためには何が必要かを考え、かるたがどのように文京区に役立つのか、活動の方向性を模索し、試行錯誤する日々が続きました。

4. 〔プロジェクト支援：意義の再定義〕地域にある資源に見える化するの、かるたの役割！

文京区に役立つかるた事業のあり方を明確にするために、平成 27 年度にプロジェクト支援にエントリーしました。そのときの審査やメンターミーティングで「かるたがどのような地域課題を、どのように解決するのか」を指摘され、「かるたでつながりを生む」とは、どういうことか、改めて明確にすることになりました。そのため、事務局とのディスカッションを重ねる中で、「文京区は地域のつながりが弱いと感じている人が多いが、実は色々な場所で活動する人のコミュニティができています。しかし、それが団体や区民に見えていない。また、新住民にとっては地域の歴史や資源も見えにくいので、地域への関心につながっていない。そのような見えていない活動や資源を「見える化」することがかるたの役目であり、しかも、かるたという遊びから入ることで、地域に興味がない人や子どもにもリーチ可能となり、地域をテーマに多世代交流が生まれるきっかけを作ることができる」という文京かるたの意義を再定義することができました。

5. 【プロジェクト支援：活動基盤の整備】かるた製作と普及のノウハウを整え、体制をつくる

再定義した意義を踏まえて活動を展開するために、かるたの絵札、読み札をどのように作り、どのように使ってもらうのか、再検討を行いました。かるたに掲載する情報は「地域とつながるきっかけとなるような地域活動や資源をリストアップし、当事者に取材して、そこから作る」「札をきっかけに地域を深く知ることができるように、詳細情報を載せた Web サイトと連動する」等を具体化し、サンプルの作成を行いました。また、掲載情報の取材を行う組織体制をつくるために、「かるたライター体験説明会」を開催し、地域で活動する人やライターの人等かるた制作に関心を持つ人が集まりました。かるたの試作版での試行を通して、本格的なかるたづくりや普及につなげることを目指しています。

【協働成果～実施者の声より】

1. 新たな公共プロジェクト支援

○参加の誘発

- ・地域貢献講座「まちかどミーティング」のプログラムで、地域の人とまじめに地域の話をしたという体験が、地域で活動を始める原動力となり、活動するなら一人ではなく、まじめに話せる仲間が必要だと考えるようになりました。
- ・「社会起業アクション・ラーニング講座」には、自分の起業だけでなく、地域を共有する皆で育ち、学び合うという独特の雰囲気があり、自然とお互いにつながろう、仲間になろうという意識が芽生えました。

○課題の再設定／プロセス支援

- ・登録プロジェクトでは、見守ってもらうイメージでしたが、支援プロジェクトは、事務局やメンターの方に踏み込んだアドバイスをしてもらい、自分たちの活動の意味を明確にすることができました。自分たちのやりたいことだけでなく、区の課題や様々なニーズをヒアリングする中で、自分なりにじっくりと考えました。時間はかかりましたが、そのことが自分の活動の根幹となりました。また、プロジェクト支援を受けることで、共感者や協力者を得るための声かけもしやすくなり、新しいメンバーが加わりました。
- ・発表の機会を何度も得ることがあり、発表に向けて、アクションを起こしたり、考えをまとめなければならないことが、活動を整理するよい機会となりました。また、人に話すことで、改めて自分の考えを深く理解したり、思いを反芻することができたと思います。

2. 地域コミュニティとの関わり

- ・交流会等、何か活動をしている方同士のつながりがあることがうれしく、励まし合っています。また、誰かが助成金を得たという話があれば、自分もチャレンジしてみようという気持ちになりました。さらに、お互いのリソースを紹介し合うなど、協力して活動していくネットワークができています。同じ区内のご近所同士だから、物理的にも気軽にミーティングができる等のメリットがあり、その気軽さは活動を継続する力になっています。
- ・新たな公共プロジェクトに参加したことで、町会、消防団等の仕組みを理解し、さらに知り合いも増える等、自身の中で地域が身近なものになりました。地縁ではない新しい「地域軸」のコミュニティを作ることができ、相互支援ができる関係性が築けたと思います。
- ・講座や支援の中で、第三者による視点で活動へのコメントや、そのつながりによって活動が進むことを経験しました。そのため、講座や支援の修了生は、自分が受けて良かったことを他の人にも行うようになり、コーディネーターの役割を果たすことで、地域活動の支援につながっていると思います。

【事業成果（アウトプット）】

- ・文京かるたの製作ノウハウの確立
- ・かるたワークショップ等の開催
- ・ワークショップ等の3年間の参加者数 188人

【地域への効果（アウトカム）】

- ・かるたワークショップやかるたづくりの取材等活動を通して異なる領域の活動が知り合い、活動同士のつながりが生まれています。
- ・区の講座修了生が継続してつながり、共に活動を行うモデルとなっています。
- ・都丸氏が、地域での活動経験を活かしながら、中間支援の役割も担うようになり、文京区における地域活動の促進にも貢献しています。



<平成 25 年度登録プロジェクト>
地域密着型介護・保育プロジェクト
(株式会社ツリー・アンド・ツリー)



【プロジェクト概要】

地域の様々な人が関わり、交流する地域密着型の民間学童保育事業を実施しています。子どもたちとご近所の方が放課後と一緒に過ごすことで、子どもたちが地域を知るきっかけとなります。また、子どもとの交流が高齢者から学生まで多世代にわたる地域の方の生きがいや、やりがいの創出にもつながっています。毎日の学童保育に加え、多世代が集うカフェ事業、昼食や夕食の提供、地域の方の協力を得てのワークショップ等を開催し、子どもを中心に地域に暮らす方たちの居場所を提供しています。

【社会課題】

学童保育の不足が大きな課題になっており、民間サービスの充実も求められています。子どもが安心して過ごせる場を、地域で支える仕組みが必要になっています。また、高齢者の居場所や生きがいづくりも課題になっており、経験を活かした活躍の機会も求められています。子どもと高齢者の多世代交流の場が必要とされています。

【実施者（林育恵氏）の思い】

会社員勤務時代に、海外勤務を経験をしたことをきっかけに日本にも身近なところに社会課題が多数あることに気づき、自分も課題解決に取り組みたいと考えるようになりました。自分も母親として多忙な日々を過ごす中で子育て支援、学童保育の不足を感じていました。その課題を高齢者の居場所やセカンドキャリアの課題と結びつけて解決できないかと考えるようになりました。

【活動の成長プロセス】

1. 〔着想〕社会課題解決のための起業をしたいと思うようになる

実践者自身も働きながら子育てをしていたため、苦勞している母親の声や学童保育の不足を感じていました。また、独居高齢者の居場所や介護サービスの不足という問題も深刻です。そこで、介護問題、待機児童問題、高齢者の孤立、世代間の断絶といった課題を地域密着型の介護サービス、学童保育を融合させることで解決の一步を提供するような事業を作りたいと考えるようになりました。

2. 〔プロジェクト登録、講座〕実現に向けて地域のネットワークを広げる

会社員時代の経験から、事業プランは自分で作ることができましたが、地域とのつながりがいないことが実現へのハードルとなりました。そこで、文京ミ・ラ・イ対話に参加して、地域の人の話を聞いたり、「社会起業アクション・ラーニング講座」を受講して地域のネットワークを広げたりしました。「社会起業フェスタ」では共感賞となり、改めてニーズがあることを確認できました。

3. 〔講座後のアクション〕試行的アクションを通じて、事業プランの手ごたえを得る

プロジェクト登録や講座を通してできた地域ネットワークから、物件の紹介もありましたが、すぐには実現できませんでした。そこで、地域の方の紹介から町会の会館を借りて、講座同期生らの協力を得ながら、春休みの特別学童保育を試行しました。そこで手ごたえを得るとともに、課題も把握することができました。その後、事業化に向けて、自宅等を開放した試行も繰り返しました。

4. 〔事業開始〕学童保育実施の物件が見つかり、学童保育オープンへ！

当初は、学童保育と介護サービスをセットで考えていましたが、介護事業については外部環境が変化中、より広く介護事業を捉え検討していくこととし、学童保育を先行して取り組むことにしました。平成 27 年 1 月に本郷地区で物件が見つかり、3 月オープンを目指して準備を進めました。新たな公共プロジェクトの仲間のデザイナーに内装をお願いする等、地域ネットワークも大事にしながら準備を進め、平成 27 年 3 月に地域密着型民間学童保育「ツリー・アンド・ツリー本郷真砂」をオープンしました。

5. 「事業の展開」カフェの併設、地域の方のリソースを活用しながら展開

民間学童保育の開設後は、地域ネットワークを活かして、地域の高齢者による囲碁教室や、大学生や地域の人によるワークショップ等を実施し、子どもたちを中心に地域の中に多世代の交流が生まれるように工夫をしています。また、子どもたちが地域社会の中で、役割を得る機会を創出したいと考えています。さらに、カフェコーナーもスタートし、小さな子どもを連れた母親や地域の人たちの居場所になっています。

【協働成果～実施者の声より】

1. 新たな公共プロジェクト支援

○継続的な参加の仕組みの構築／資源連結

- ・「社会起業アクション・ラーニング講座」を受講したことの最大のメリットは人脈ができたことだと思います。自分のやりたいことに興味を持ってくれる方が多く、色々と声をかけてもらえるようになり、事業開始まで、多くの方が気にかけてくれるようになりました。
- ・文京ミ・ラ・イ対話で色々な方に出会い、ネットワークができました。協力者等も紹介してもらえたのがよかったと思います。地域にネットワークがある中で、事業を立ち上げると起業に対する不安が和らぎました。
- ・「登録プロジェクト」として登録されていることで、知名度や信頼度がアップし、地域とのつながりづくりに影響を与え、活動しやすくなりました。

2. 地域コミュニティとの関わり

- ・地域密着型の事業を行うには、地域とのつながりが重要だとわかりました。様々な人に紹介してもらったり実際に会ったりする中で、顔見知りになっていくことで理解も信頼も得られました。
- ・地域住民が学童保育のスタッフを務める等、地域の人材のつながりが事業を支えています。

【事業成果（アウトプット）】

- ・平成 27 年 3 月に、地域密着型民間学童保育「ツリー・アンド・ツリー本郷真砂」を開設。（カフェも実施）
- ・地域の方がスタッフとして参加（スタッフ数 12 人程度）
- ・平成 27 年度 定常的な利用者数 約 30 人
- ・イベント回数 40 回以上（平成 25～26 年度プレオープンでの参加者数 延べ 133 人）

〔利用者の様子〕

- ・一度利用した子供が「また来たい」「帰りたくない」と言ってくれる姿に励まされます。
- ・子供と触れ合う高齢者の方々の幸せそうな表情を見ると、手掛けてよかったと思います。
- ・近隣のシニアの方々は、カフェが居心地が良いと定期的に通ってくださっています。また、子育てママ達は、幼稚園送りのついでにちょうどよい、小さい子どもと一緒に来店しやすい、等の声をいただいています。

【地域への効果（アウトカム）】

- ・子どもたちが学童保育で出会った大人たちと街中で会う等、つながりが広がっています。
- ・近隣の高齢者や子育て世帯にとって顔見知りが増えることで、地域暮らしの安心感につながっています。
- ・子どもたちの居場所はもちろんのこと、地域の大人の居場所も創出しています。



ツリー・アンド・ツリー HP より (<http://treeandtree.co.jp/>)

<平成 25 年度登録プロジェクト>
武道（スポーツ）によるコミュニティ作り
（夜 9 時までの子育て支援）
（TEAM 空）



【プロジェクト概要】

夜 9 時までの空手教室を実施しています。学童保育修了後に、道場近くのコミュニティカフェ「風のやすみば」に集団で移動し、そこで夕食を取ったあとに空手教室で稽古をする、という形で子どもを預かる事業です。当初は 4 ヶ月間だけ試行する予定でしたが、保護者から継続の要望が多く、現在も事業を継続しています。

【社会課題】

共働きで育児をする世帯では、仕事が終わった後に子どもを迎えに行ってから夕食の準備等夕方の時間に大きな負担があります。
また、親の帰りが遅くなることで、一人で食事をする「孤食」等も広がっており、子どもの精神的・身体的な成長にも悪影響を及ぼす可能性があります。

【実施者（船戸保志氏）の思い】

文京ミ・ラ・イ対話に参加したことをきっかけに、子育て世帯が地域でのつながりがなく困っていることや、地域には色々な活動や資源があることに気づきました。それらを結び付けて事業を企画・運営するのに、自分のビジネススキルや空手道場、町会活動の経験等が活かそうだと気づき、新しい取組を始めようと考えました。

【活動の成長プロセス】

1. 〔文京ミ・ラ・イ対話:課題の発見〕 対話への参加で、地域の困り事に気づく

「スポーツとコミュニティ」がテーマの「文京ミ・ラ・イ対話」に、知人の紹介で参加しました。それをきっかけにいくつかの対話に参加していると、子育て女性が夕食の時間に苦労している話を聞き、「習い事の間は、母親は子どもから手が空く時間になっている」という子育て支援の別の意味に気づきました。同じ時期、勤務先でも子どものお迎えのために早く退社する社員がいたことも結びつき、習い事で子どもを預かることで子育て支援の事業になると考えました。

2. 〔文京ミ・ラ・イ対話:地域資源とのつながり〕 対話の中で地域資源に気づき、つながりができた！

子育て支援事業のアイデアを、勤務先の研修で使用したフレームワークを活用して考えたところ、ビジネスとしても実施できそうだという実感を得ました。まず、子育て支援事業について、近隣の空手道場に相談したところ快諾を得ましたが、食事には対応できないことが大きな課題でした。その後、対話の場で自分のアイデアを話したところ、コミュニティカフェを運営している NPO 法人「風のやすみば」のスタッフが興味を持ってくれました。NPO 法人の代表とも話し合い、4 か月間限定という約束で食事提供の協力を得ることができました。

3. 〔プロジェクト登録:試行〕 4 か月間限定で実施したところ、強いニーズがあることがわかる

4 ヶ月間限定の試行期間では、週 1 回、5:45 に学童保育からコミュニティカフェに移動して食事をとり、6:45 に空手教室の先生がコミュニティカフェから近隣の小学校の体育館に引率し、9 時に親が迎えに来るまで空手の稽古で過ごす活動を設計しました。1 ヶ月の利用料金を 1 人 6,000 円と設定しました。

4 ヶ月間の試行後に、保護者会を開いたところ、継続してほしいという意見が多数あり、事業を継続することになりました。

また、このサービスを利用すると、平日は親子のコミュニケーションが希薄になる恐れがあるので、その分週末に、子供と保護者のつながりや世代を超えた交流ができるように「日曜空手道倶楽部」という活動も立ち上げました。

4. 〔事業の継続〕 事業が軌道に乗る。ヤフーニュースに掲載され、注目される！

次年度は、文京ミ・ラ・イ対話で出会った文京区社会福祉協議会のスタッフから紹介されたスタートアップ助成金を活用して、事業を継続しました。運営については、当初は、船戸氏を中心になって行っていましたが、運営スキームが固まっているため、現在は、空手道場とコミュニティカフェの協働事業として運営しています。

活動を続けている中で、子育て支援策としてヤフーニュースに記事が掲載されたことにより、視察が増えるなど注目されるようになりました。

5. 「事業の展開」 他地域でも実施できるように広げていく！

活動がヤフーニュースに出たことをきっかけに、他の地域の起業講座に講師として招かれました。その経験から自分たちの活動のノウハウを明確にすることができました。そこで、習い事などを活かした子育て支援のスキームとノウハウを他地域にも横展開していくことで、働く子育て世代を支援していきたいと考えています。また、地域活動の広報の難しさや地域の子育て活動の連携などの課題も見えてきたので、そこにも新しい事業を展開していくことが可能だと考えています。

【協働成果～実施者の声より】

1. 新たな公共プロジェクト支援

○参加の誘発／資源連結／継続的な参加の仕組みの構築

- ・文京ミ・ラ・イ対話への参加によって、地域の課題を新しい視点から知ることができました。もともとお祭りや町会など地域活動には参加していましたが、対話の場で「スープの冷めない距離でつながりがほしい」という方が多く、そのようなつながりが求められていることを初めて認識しました。
- ・今回の地域支援事業を立ち上げる経験を通して地域の知り合いも増え、自分のビジネスで培ってきた新事業企画・開発・推進のノウハウが活かせることもわかりました。加えて、定年後の地域での活動のイメージもできてきました。

2. 地域コミュニティとの関わり

- ・町会の地域を越えた知り合いが増えました。特に、地域支援に関心がある方には、自分のビジネススキルを活かしてサポートしたいと考えています。
- ・対話やイベントで自分のアイデアを話すことで、NPO 法人「風のやすみば」や文京区社会福祉協議会など事業づくりに必要な地域資源と出会うことができました。コミュニティカフェ「風」の存在は、知っているだけでしたが、事業を通してつながることができました。
- ・新しく活動を始めた人々と、地域のイベントなどで、地域活動間のつながりも生み出していきたいですし、そこに自分のビジネスノウハウを活かしていきたいと考えます。

【事業成果（アウトプット）】

- ・食事提供と空手練習を組み合わせた夜 9 時までの預かり保育事業（平成 26 年 4 月～平成 28 年 3 月）利用者数 延べ 258 人
- ・その他、親子の日曜日の空手教室 参加者数 延べ 1920 人（2016 年 8 月現在、TEAM 空にて運営、支援している地域サービス（夜 9 時までの子育て支援、日曜空手道倶楽部など）の登録会員は、80 人を超えています。）



【地域への効果（アウトカム）】

- ・利用者の方から、「サービスは自分と子どもの生活の一部になっています」という声があがっています。
- ・「風のやすみば」では、本事業を参考に、子どもに食事つきで勉強を教える会を始めています。
- ・空手道場では、いけばな教室、法政大学の学生ゼミとのコラボが生まれるなど広がりを見せています。
- ・小金井市の企業化団体にて、夜 9 時までの預かり保育事業を参考に同サービスの企画が始まっています。



<平成 25 年度社会起業アクション・
ラーニング講座修了生プロジェクト>
文京社会験学コンテスト
(高校生向け起業体験プログラム「まじプロ」)
(NPO 法人 Curiosity)



【プロジェクト概要】

高校生向けチャリティ起業体験プログラム「まじプロ」を実施しています。高校生が支援する社会問題を選び、チャリティ資金の獲得に向けたイベントや物販等の企画を自らのグループで行います。この活動で得た収益は、自ら希望したNPO等へ寄付します。共に活動に参加する同世代の仲間をはじめ、地域で働く方、活動を支える社会人や大学生、社会問題の解決に向けて活動する方等、世代、職業、属性を超えた様々な人が関わることで、多様な価値観に触れることを目指します。

【社会課題】

高校生や大学生にとって、他世代の人や地域で働く人等、多様な価値観に触れる機会が少なく、進路や仕事、社会へのイメージを持ちにくい状況です。また、自分で考えて何か行動を起こすという経験や、「お金を稼ぐ・対価を得る」「社会課題を認識・解決する難しさ」というリアルな経験の機会が欠けています。

【実施者（小川智康氏）の思い】

高校生たちには、情報があふれる中で、自分の体験を通して得た知識や経験が人生において重要な意味を持つと考えています。そして、進路を決める岐路に立つ前、早い段階で今の自分と将来について考え、向き合う機会を増やすことです。そのような機会を提供するために、学生時代の仲間と NPO 法人を立ち上げました。

【活動の成長プロセス】

1. 〔社会起業アクション・ラーニング講座：着想〕高校生には体験を通して学ぶ験学が必要だ！

会社で務めながら高校生の生きる力をつけるための活動を行おうと学生時代の仲間と NPO を立ち上げて活動していましたが、それぞれの仕事が忙しくなる中で、展開を模索していました。地元の企業での体験等ができないかと考えるようになりましたが、学生時代から文京区に住んでいても地域活動に参加したことがなかったため、先ず文京ミ・ラ・イ対話に参加し、新たな公共プロジェクトへの参加者のイメージを確認し、これなら自分も参加できそうと考え、「社会起業アクション・ラーニング講座」を受講することになりました。

そこで、それまで考えていた体験を通して学ぶ「社会験学」の事業プランをまとめました。

2. 〔社会起業フェスタ：仲間づくり〕プランを発表することで仲間が広がった

「社会起業フェスタ」で「社会験学」を発表したところ、問題意識を共有する方たち3人と出会えました。イベントで会ったことで終わらせず、再度、アポをとって会い、問題意識や事業プランについて話し合ったことで、新しい活動を一緒に取り組むチームができました。また、高校生や大学生と意見交換することで、現状についての理解も深まっていきました。

3. 〔プロジェクトの立ち上げ〕企画を固め、青少年課の助成金を得ることで、一気に実現となった

チームでの議論を重ねる中で、当初想定していた企業での仕事体験よりも、高校生が自分でプロジェクトを設計し、運営してお金も扱う体験が大切ではないかという話しになり、「チャリティ起業体験」というコンセプトになりました。同時期に、児童青少年課の助成金を得て団体の運営資金を確保することもできました。

高校生の募集や高校への協力依頼に苦労しながら、地域の人たちの協力も得て進めていきました。また「社会起業アクション・ラーニング講座」の経験から事業を相談できるメンターミーティングの大切さを感じ、高校生へのメンター役を多方面で活躍する社会人の方にお願ひしました。半年間のプログラムを経て、最終発表会は文化シヤッター株式会社のホール提供の協力を得て、区長もゲストに招き、約70名が集まるイベントとして実施しました。

4. 〔事業の展開へ〕仲間を集め、継続できる基盤づくりへ

1年目の経験から、サポートしてくれる人の大切さを感じ、交流会やバーベキュー等のつながりづくりにも力を入れるようになりました。また、大学生のインターンを増やしたり、「社会起業アクション・ラーニング講座」の次年度以降の修了生やメンターの方等で共感してくれる方たちがチームに加わったりすることで、運営できる体制をつくっています。2年目以降は「まじプロ」という名称で活動を展開しています。今後、より多くの高校生に参加してもらえるようプロジェクトを良いものにしていき、事業としての成長を目指しています。

【協働成果～実施者の声より】

1. 新たな公共プロジェクト支援

○参加の誘発／資源連結

- ・「社会起業アクション・ラーニング講座」に参加したことで、地域との接点を持つことができました。NPOを立ち上げて、初めて地域のコミュニティと関わるきっかけとなりました。
- ・活動に共感した他年度の「社会起業アクション・ラーニング講座」修了生もスタッフとして、手伝ってくれています。
- ・また、「社会起業フェスタ」でのサポーターとの出会いが、事業を大きく進展するきっかけとなりました。サポーターのプロボノ的なアドバイスが、事業を具体化、実現化、継続化に導いています。また、サポーターの方が、地域の方なので、地元の小学校でのワークショップ開催をアレンジしてくださる等、具体的なプロジェクト実行の大きな支援になっています。

2. 地域コミュニティとの関わり

- ・コンテストに参加する高校生への告知等は地元の学校の協力を得て行っています。さらに、高校生のプロジェクトの中で、発表会の場所の提供や、プロジェクトへの協力等、地域の商店街や地域企業の協力をいただいています。

【事業成果（アウトプット）】

【アウトプット】

- ・高校生チャリティ起業体験プログラムの実施
- ・イベント・プログラム回数 平成26年7回、平成27年4回
- ・参加者数 平成26年60人、平成27年380人
(回数・参加者数には高校生が実施したイベントの来場者数を含む)



【地域への成果（アウトカム）】

- ・高校生の活動での売り上げは NPO 団体に寄付されることになっています。文京区や若者に関する NPO 団体同士のつながりの機会にもなっています。

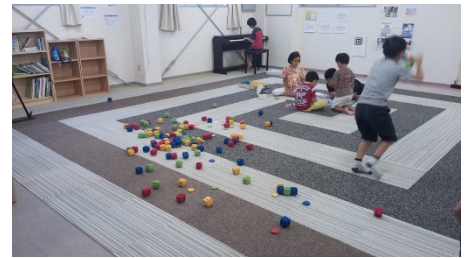
〔参加した高校生の声〕

- ・チームでの役割分担の大切さに気づきました。
- ・状況に柔軟に対応することの大切さに気づきました。
- ・企画することのたいへんさと面白さを知りました。
- ・NPO 団体やイベント等で、たくさんの大人たちと話すことができました。



NPO 法人 Curiosity HP より (<http://www.curiosity.or.jp/>)

<平成 25 年度社会起業アクション・
ラーニング講座修了生の参画プロジェクト>
まちの暮らしを喜び・楽しむ「まちの LDK」@小石川
(さきちゃんち)



【プロジェクト概要】

子どもたちが街の人に見守られながら、あそび、まなび、くつろぐ子どもたちの居場所、街の拠点＝「まちの LDK」として運営されている「さきちゃんち」。通常の運営に加え、子ども向けや、子育てママ向け、親子向けのイベントなどを実施し、子どもたちや子育てママの居場所となっています。また、お年寄りから縫い物を学ぶなど、多世代交流の場としても機能しています。

【社会課題】

文京区は、マンションの増加に伴い、子どもは増えていますが、乳幼児のお母さんが孤独を感じていたり、共働き世帯では子どもが孤立していたりする状況が起きています。地域で子育てする親が助け合えるつながりや、子どもたちを見守る場が求められています。そのため地域に人が気軽に集える拠点と支え合える関係性を作る必要があります。

【実践者の思い】

実践者は、前職で地域の防災、防犯、バリアフリーなどのまちづくりに長年携わりました。東日本大震災をきっかけに生活を中心とした地域づくりを始めたいと考えようになりました。まちには課題がたくさんありますが、宝物（資源）もたくさんあります。人が集う場をつくり、アイデアを出し合うような場、多世代がつながる場が大切だと考えています。

【活動の成長プロセス】

1. 【社会起業アクション・ラーニング講座：着想】住民自治につながる環境を創りたい！

実施者は、地域づくりに関連する仕事をしてきたことから、地域の子育て仲間との関わりと活動を通じて、住民が自ら地域の課題を解決するための環境づくりをしたいと考えていました。東日本大震災を機にフリーランスとなり、地域で仕事をつくるために、平成 24 年度の社会起業講座や地域貢献講座などの区の講座に参加し、思いや考えを共有できる仲間を広げていきました。その後、平成 25 年度の「社会起業アクション・ラーニング講座」で「まちの LDK」というコンセプトをまとめました。家の LDK は家族が食事をし、くつろぎ、語り合う場ですが、地域の中にも、まちの人が食事をし、くつろぎ、語り合い、そして新たなアイデアで活動をはじめられる場が必要だと考えました。その時点ではプランを実現できませんでしたが、「社会起業フェスタ」で、共感する仲間をつくることができました。

2. 【実現への模索】地域での活動を通して試行とネットワークづくり

講座修了後、子育てを通して知り合った仲間と以前立ち上げた地域情報サイトのリニューアルに取り組み、子育てやコミュニティスペースをキーワードに地元の情報などを取材・発信し、地域とのつながりがさらに広がりました。また、「社会起業フェスタ」でつながった仲間と小石川マルシェに出店したり、レンタルスペースで居場所づくりに取り組んだりして、経験を積み重ねていきました。その中で、「子どもを中心に、地域の人が集う環境」をつくっていく可能性を見出していきました。

3. 【実現への転機】地元の空きスペースを活かした活動ができることに！

地域での人脈が広がったことから文京区社会福祉協議会の地域福祉コーディネーターから、小石川で空きスペースを地域のために提供できるオーナーを紹介してもらいました。オーナーが駒込の「こまじいの家」のオーナーと知り合いで、かつて事務所として貸していた 120 平米の空きスペースの新しい活用を考えていました。有志メンバー 5 人で「子どもたちが安心して過ごせて、地域の人同士がつながることのできる場所」を提案したところ、「子どものためになら」と無料で貸していただけることとなり、このスペースの利用が決まりました。

4. 〔活動の立ち上げ〕 地域の人たちの協力を得て「さきちゃんち」をオープン！

スペースの名前が「さきちゃんち」と決まり、誰もが立ち寄れる「まちのLDK」というコンセプトが実現することになりました。準備を開始すると、地域の人たちのつながりで、テーブルやイス、食器棚や本棚、おもちゃ類やベビーベッド、床に敷くタイルカーペットまで寄付があり、地域の人たちの力を借りて準備が進みました。4月のプレオープンから親子サロンや子ども図書館を試行したところ、徐々に人が集まり始め、多彩なワークショップが始まりました。場所のロゴづくりなどにも子どもの意見を取り入れるなど、子どもがいて、地域の人たちがつながっていくというコンセプトが実現していきました。

5. 〔活動の展開期へ〕

現在では、さきちゃんち運営委員会をつくり、月曜日から金曜日まで、子育てサロンを中心とした曜日ごとのプログラムを実施しています。集まった親子で情報交換ができるだけでなく、利用者の提案や要望によって企画したイベント、おたがいさま食堂や子ども食堂等の食に関する活動、地域の高齢者の皆さんとの交流のワークショップ等、活動の幅を広げています。

【協働成果～実施者の声より】

1. 新たな公共プロジェクト支援

○継続的な参加の仕組みの構築

- ・「社会起業アクション・ラーニング講座」に参加し、地域には自分と同じような考えの人がいると分かったことが収穫だったと思います。講座を通じて、地域での知り合いが増え、また、キーパーソンと出会うことができました。新たな公共プロジェクトのプログラムの中で出会い、共に運営スタッフとなった人もいます。

○プロセス支援

- ・「社会起業アクション・ラーニング講座」の中で、自分の想いを文章としてまとめることで、やりたいことの方角性が定まったと思います。

2. 地域コミュニティとの関わり

- ・文京区社会福祉協議会とつながり、そこから地域の方から場所の無償提供を得たことは、「さきちゃんち」の実現の大きな要因で、また、現在のスタッフ5名は、ボランタリー的に無償で地域の方が関わっています。
- ・地域活動をしてみて、地域で活動することの難しさも感じました。「地域」は、生活する場であり、事業を展開する場としての環境（ひと、もの、こと）は必ずしも整っていません。サービスを受けるだけでなく、居場所をつくることなど、住民自身が地域の課題に取り組むべきだと思います。行政も、この意識を醸成することで新たな社会を形づくることができると感じています。

【事業成果（アウトプット）】

- ・「さきちゃんち」を、平成27年度に開設
利用者数 延べ約2,400人
(平成27年9月～平成28年3月)
- ・地域の子どもたちの居場所として、子育て中の親子や地域の交流の場としてのプログラムを提供しています。

【地域への効果（アウトカム）】

- ・地域のハブとして、さきちゃんちを舞台に、多様な活動と地域の親子や高齢者のつながりが広がっています。
- ・地域の居場所づくりのモデルとして注目を集めています。



さきちゃんち Facebook より
(<https://www.facebook.com/sakichanchi/>)

3 地域への波及効果

(1) 地域プロジェクトを支える人たち

地域の担い手としては、自分のプロジェクトを中心となって実施する主体者に加え、それらのプロジェクトをサポートする方たちもいます。3年間の「新たな公共プロジェクト」の取組の中で、各プロジェクトの成長には、これらの“サポーターの方の役割が大きいこと”が明確になりました。

また、地域の中には、自らプロジェクトを立ち上げて実施することはできないが、地域で何かやりたい、“自分を活かしたいと考えている方が多く存在”していることも明確になりました。

実際に、3年間の取組の中では、そうしたフォロワー的な立場で地域活動に関わり、サポートする方を多く発掘することができました。

彼らは、個々のプロジェクトの成長にも大きく寄与するとともに、地域活動を支える基盤の一員としても、地域ネットワークの要となる重要な役割を果たしています。

① Aさんの場合 (40代 女性(主婦))

活動の内容	・対話の場をきっかけに、地域で活動している方と出会い、地域の様々な活動をサポートするようになりました。現在、「さきちゃんち」代表、映画交流クラブのコアメンバー等、多くの団体のサポートを行っています。
「新たな公共プロジェクト」の果たした役割	・対話の場により、地域課題、ニーズとの出会いが活動のきっかけとなりました。 ・多くのプログラムや交流会活動に参加することで、地域にネットワークが広がり、次々とプロジェクトへ参画するようになりました。
地域コミュニティの役割	・自ら活動を立ち上げるというよりは、他の担い手のサポートを志向していたため、関係しているプロジェクト以外にも、相互支援ネットワークの要となっています。 ・プログラムへの参加をきっかけに、地域の知り合いが増え、地域密着型の活動へ参画することができました。

② Bさんの場合 (40代 男性(公務員))

活動の内容	・対話の場、「社会起業フェスタ」をきっかけに、地域活動をしている団体や人と出会い、自分のやりたかった地域活動を始めるきっかけとなりました。公務員というスキルを活用して、NPO 法人街ing 本郷（ひとつ屋根の下事業）、NPO 法人Curiosityのプロジェクトをサポートしています。
「新たな公共プロジェクト」の果たした役割	・対話の場をきっかけに、地域課題やニーズを知り、自分のスキルを活かして、活動できることを知りました。 ・文京区に住んでいるが、地域の知り合いがほとんどいませんでした。しかし「新たな公共プロジェクト」をきっかけに、地域の活動に参画し、それにより地域のネットワークが広がっていきました。
地域コミュニティの役割	・地縁者と知り合い、自ら暖めてきた新しいプロジェクトの提案も可能となりました。 ・交流会への参加により、他の担い手ともつながり、適宜サポートを継続しています（相互支援への参画）。 ・助成金を得て、サポートしているプロジェクトを運営しています。

上記の2人以外にも、「社会起業フェスタ」をきっかけに、自らの専門性を生かして地域活動をサポートしている方や、商店街の青年部の方がプロジェクトと連携して地域活性化事業へ取り組むといったケースもありました。また、「社会起業アクション・ラーニング講座」の受講生が、自らのプロジェクトと関連性のあるプロジェクトのメンバーとなり、活躍しているといったケースもみられます。

このようなサポーターは、地域には潜在的に多く存在しています。しかし、地域で活動するための仲間や自分の役割を得るチャンスがほしいと思っても、そのきっかけを見出せない

場合が多いと思われます。「新たな公共プロジェクト」では、連続的で体系的なプログラムを実施し、さらに、担い手の見える化を行うことで、それらの人材にリーチし、そのきっかけを提供してきました。その結果、多くのサポーターを発掘し、担い手を支える基盤の一つとしてのサポーターの活躍の場をつくったといえます。今後、このようにサポーターを得ていくためには、プロジェクト実施者との出会いの場や、チャンスの提供及びその際の明確な役割の提示が必要になってきます。

さらに、プロジェクト実施者に加え、これらの“担い手の方々のネットワーク「交流会」”も広がっています。今後、こうしたネットワークの拡大が、活動を支える基盤（地域の課題対応力）の向上へとつながっていくことが期待されます。

(2) 地域プロジェクトの受益者

この3年間で、担い手によるワークショップ等様々なイベントが開催されました。担い手が提供するプログラムやイベントに参加することで、受益者は課題解決のためのサービスを受けることになります。担い手のプロジェクト数の増加及び成熟により、その受益者数は年々増加しています（表2）。

表2 3年間の担い手提供プロジェクトのサービスの受益者数

	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	3 年間累計
プログラム・イベント 延べ参加者数	453 人	2,234 人	3,281 人	5,968 人

※担い手アンケート調査において把握できている数値のみ

また、サービスの受益者からも、サービス提供に対する感謝や、生活の中で抱えていた不安や困り事が解決しているという声を得ています。

【サービス受益者の声の一部】

○ハッピーファミリープロジェクト（子育て kitchen）

- ・肩の力が抜けて、子育てを楽しめるようになりました。
- ・料理だけでなく、家事全般もイライラすることなく子どもと一緒にできるように（しかも戦力に）になりました。
- ・食が細い子どもでも、自分で作ると本当によく食べるし、スーパーでも、お菓子から食材に興味を持ち始めました。好き嫌いが減ったことも嬉しいことです。

○夜9時までの子育て支援（TEAM 空）

- ・このサービスは、母親にとっても、子供にとっても生活の一部となっているため、ぜひ続けてほしいです。
- ・引きこもりだった子供が、大きな声で挨拶するようになりました。

なお、図 24 のように、約 21 万人の文京区民の中で、0.4%に当たる約 800 人が「新たな公共プロジェクト」のイベントに参加し、3%に当たる 6,000 人弱の方が受益者としてサービスを受けたことになります。

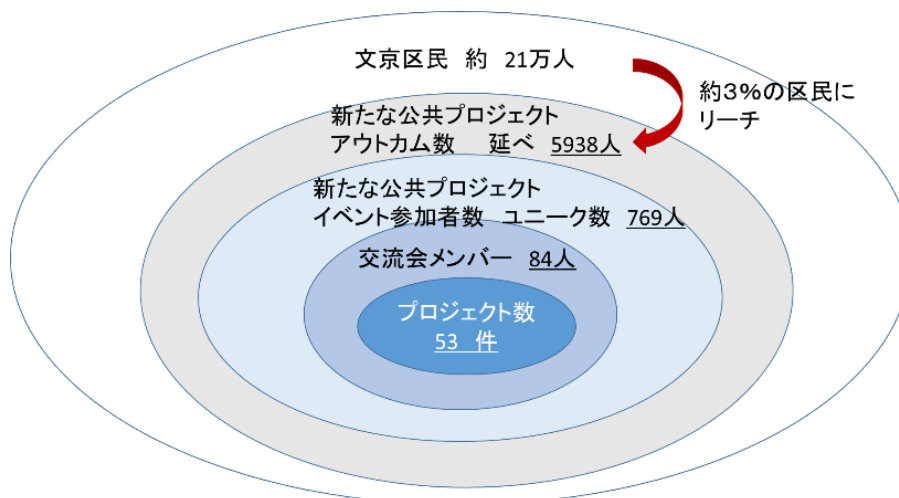


図 24 「新たな公共の担い手」のプロジェクトのアウトリーチ数

(3) 新たな公共プロジェクトが契機となったコミュニティの形成例

地域活動をきっかけに、自分の活動を成長させる以外にも、地域のコミュニティのメンバーとしての成長等も見られました。

「新たな公共プロジェクト」が単に、地域課題の解決のプロジェクトを生み出しただけではなく、プロジェクトの実施を通じて、区民の“地域コミュニティのメンバーとしてのステージアップ”や、“地域全体での新しい活動を生み出すための基盤構築”へも影響しています。

【ケース1】「さきちゃんち」の場合

○ネットワークを活用して地域の居場所が実現

「さきちゃんち」は、地域の子どものための居場所として、平成 27 年から運営しています。「社会起業アクション・ラーニング講座」の受講生だった方の構想が実現に至りました。居場所づくりの一番の課題は、「場所」です。「さきちゃんち」の場合は、「こまじいの家」の活動について知った大家さんからのご好意で「場所」が提供されました。「さきちゃんち」の実現には、「大家さんがこまじいの家のことを知る」「そういう大家さんがいることを社協が知る」「場所を探している方がいることを社協が知る」「大家さんと場所を探している方をつなぐ」といった、様々なネットワークの連結によるものです。地域活動の実現には、一つのネットワークだけではなく、多くのネットワークの連結により加速することがあります。「新たな公共プロジェクト」が作ってきた地域活動の基盤、プラットフォームは、こうしたネットワークや情報を連結させる役割も担っています。

【ケース2】「ぶんきょう・いんぐれす」の場合

○プロジェクト実施経験がさらなる地域活動へ発展

「ぶんきょう・いんぐれす」の活動を通じて、地域に目を向けるようになりました。「ぶんきょう・いんぐれす」の活動以降は、地域でフラメンコギター教室の開催や、高齢者施設でのギター演奏等、別の地域活動にも発展しています。

【ケース3】子どもの貧困を守る活動の場合

○地域課題を面で解決するコミュニティが形成

区内に住む父子家庭の男の子とその家族の困り事を「新たな公共プロジェクト」のメンバーが知ったことから、メンバーで連携して男の子を見守るコミュニティをつくり、ゆるくサポートする体制ができました。さらに、困窮を支援するだけでなく、男の子がイベント等のお手伝いができるような「出番」を作り、自身で自己肯定感を得られるようにしました。これは行政の措置的な対応では解決できない社会課題解決の一つ成果といえます。その後もその男の子の成長を、メンバーで連携しながら地域で見守り続けています。

【ケース4】「ブンキョー庶務部」の場合

○プロジェクト参画が、地域のメンバーとしての意識を醸成

世田谷区で活動する非営利型株式会社 Polaris の文京区版という形で、子育て中のお母さんも助け合いながら仕事をする「ブンキョー庶務部」が立ち上がっています。「ブンキョー庶務部」の現在のコアメンバーは、当初は少し仕事ができればいかなりの受身的な関わり方でしたが、活動を進めるうちに自分たちでプロジェクトを作ることに価値を感じ、主体的にプロジェクトに関わるようになりました。また、地域のイベントに仕事として関わる中で、これまであまり気にしていなかった「地域」のことに目が向くようになりました。地域で生活している実感を得るとともに、プロジェクトに参画することで、共に地域社会を作るメンバーとしての意識が醸成されてきたといえます。

【ケース5】「échelle（エシェル）プロジェクト」の場合

○プロジェクトの実施経験が、中間支援的な人材へと成長を促す

échelleプロジェクトとして活動をしていた方が、家族の仕事の都合により海外へ一時転居しているため、文京区での活動は休止していました。しかし、文京区での活動実績を知る方から、日本人向けのワークショップ等の企画・運営の手伝いを打診され、アドバイザー的な立場で、新天地でも活動を続けています。一通りプロジェクトを実施した経験からわかる、活動を進めるためのポイント等があり、それが他の方のサポートをするときにも役立っています。これらの経験から、今後は、他の方の活動をサポートする役割を実施していくのもよいのではと考え始めています。

4 区の協働推進への影響

(1) 新たな公共プロジェクトの全庁的な取組

平成 24 年度に「専門家会議」より出された提言の中には、担い手創出・育成に加え、“区の組織・風土を改革する”ことも盛り込まれています。「新たな公共プロジェクト」では、この提言を受けて、担い手創出・育成に全庁的に取り組むとともに、組織内での意識改革を目指し、以下の取組を実施してきました。

① 文京区協働推進委員会の設置

「新たな公共プロジェクト」を組織的に取り組むため、「文京区協働推進委員会」を設置し、組織横断的な調整機能を果たしました。委員は、各部の庶務担当課長で構成されており、「新たな公共プロジェクト」についての情報共有や議論を実施したことで、幹部職員に対する「新たな公共プロジェクト」や協働の取組に対する周知や意識変革に寄与し、全庁的に協働を推進させる一助となりました。

② 区民部への協働推進担当課長ポストの設置（組織改正に伴い平成 28 年 3 月末に廃止）

「新たな公共プロジェクト」を実施し、全庁的な協働を推進していくため、平成 25 年 4 月に協働推進担当課長が設置され、強固な体制で「新たな公共プロジェクト」に臨むとともに、全庁的に協働推進を実践していく先導的な役割を果たしました。

また、活動の担い手候補の区民と丁寧に向き合い、ニーズを汲み取りながら適切なプログラムを紹介し、関係課や関係機関を紹介する等、権限を委譲された専任だからこそその細やかで挑戦的な対応が、担い手創出・育成のための基盤づくりに大きく貢献しました。

③ 担い手育成への参画

「支援本部」（担い手育成に関して見識ある専門家からのアドバイス等が広く得られる体制として設置）は、専門家に加え、区民部管理職も参画しました。また、この本部で実施される支援プロジェクトの選考については、関係課も参画し、区の課題や区民ニーズとの整合性、協働相手としての妥当性といった観点から審査しました。

また、支援プロジェクト採択後も、定期的なミーティングへの参加や担い手活動へのサポートも担いました。

担い手育成に関係課が参画することで、担い手の個人的な課題意識が“地域や社会課題としてとらえることへの意識の変容”“区が支援することの意味の理解”となることを促し、自らの個人的な課題を“パブリックな課題へ再設定”する必要性を認識させることとなりました。

このように、担い手の課題意識の変革を行い、それを言語化するというプロセスが、結果として、その活動に“多くの共感者を得るソーシャルキャピタル（社会関係資本）¹²の形成”に寄与し、担い手の成長や活動の飛躍を促しました。

¹² ソーシャルキャピタル（社会関係資本）とは、人と人との関係性や助け合いが社会関係資本のこと地域の力の源泉となるという考え方

④ 「文京ミ・ラ・イ対話」への区職員による情報提供及び参加

平成25・26年度の「文京ミ・ラ・イ対話」では、重点的に区民と協働して地域課題の解決を図りたいテーマを重点テーマとし、行政組織から提案された“行政だけでは解決できない課題”を基に重点テーマとするとともに、対話のテーマとしていました。関係課は、テーマの提供に加え、関連するテーマの対話の場に参加し、区の取組についての情報提供等を行いました。

職員が区民とともに立場を超えて議論をすることで、地域課題への新たな気づきを促すとともに、協働への意識の向上が図られました。また、参加した区民にとっても、区の取組や考えを知るよいチャンスとなり、対等な協働推進への一歩となりました。

なお、3年間における、区職員の対話の場への参加人数は、延べ47人となっています。

⑤ 庁内職員への「協働・協治」に関する研修の実施

庁内職員への協働への意識改革のため、協働推進担当課長及び「パートナー事業者」による「協働・協治」に関する講義、研修を行いました。参加者アンケートでは、協働推進に対して新しい気づきを得たという意見を多く得ています。また、後述のように研修が、「新たな公共プロジェクト」の意義の理解や協働への意識変革に大きく寄与しているといえます。なお、3年間の「協働・協治」に関する研修の受講者は、述べ907人となっています。

- 「新たな公共の担い手」との協働推進研修（全職員対象）
- 新任研修「区の協働」（新任職員対象）
- NPO等地域団体派遣研修（入区3年目の職員対象）
- 協働研修（基礎編）（入区5年目の職員対象）
- 協働研修（応用編）（係長昇任3年目の職員対象）

(2) 新たな公共プロジェクトの「区の組織風土変革」への影響及び今後の課題～職員アンケート調査結果より

① 職員アンケート調査の結果から見る「新たな公共プロジェクト」の区組織の風土改革への影響

「新たな公共プロジェクト」の区の組織風土改革への影響を、職員向けのアンケート調査（対象者：区職員1,000人、有効回答数：397人、調査期間：平成28年2月17日～3月9日）からみると、「新たな公共プロジェクト」を認知し、何らかの形で関わった職員については、協働に対する考えが変化していることが窺えます（図25）。具体的な行動の変化にはまだつながっていないものの、“意識変革”として、「協働を意識するようになった」「協働相手の立場を理解したい」といった変化が見られます（図26）。

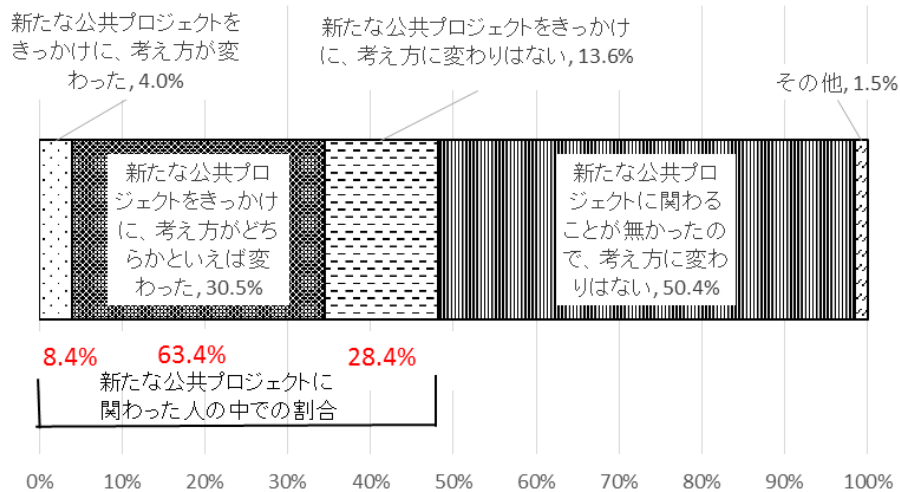


図 25 協働に関する考え方の変化 (n=397)

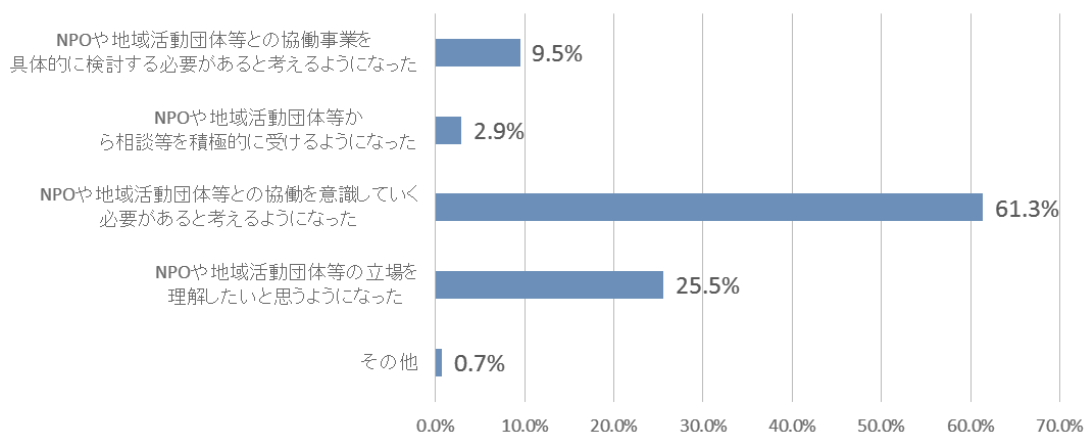


図 26 具体的な協働の考えの変化 (n=137)

【職員の声】

自治体職員が少なくなる中で、行政だけで地域課題を解決できなくなる傾向にあると思います。区職員と地域の方の両者がお互いの状況をよく理解し合うことから始め、将来のことについて同じ方向で取り組んでいけるようになれば、よりよい自治体に発展すると思います。そのためにも、全ての職員が地域と関わる「機会、きっかけ」が必要ではないかと感じます。(事務系職員、協働事業なし)

協働事業に関わっている場合の取組状況の変化も、「新たな公共プロジェクト」をきっかけに、「増えた」「検討」といった具体的影響が見られました(図 27)。

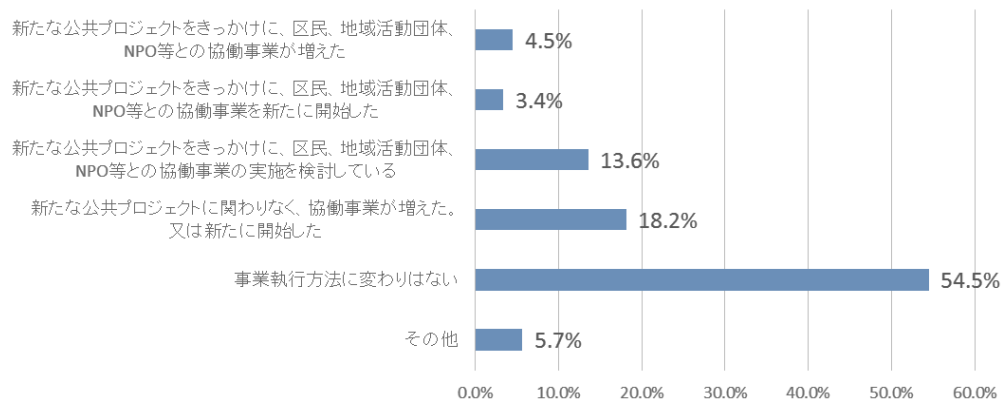


図 27 協働事業への取組状況の変化 (n=90)

職員の意識変化には、「協働・協治」に関する研修実施による効果も見られます。3年間で1,000人弱の区職員が受講しており、少なからず、職員の意識改革に寄与したといえます（図28）。

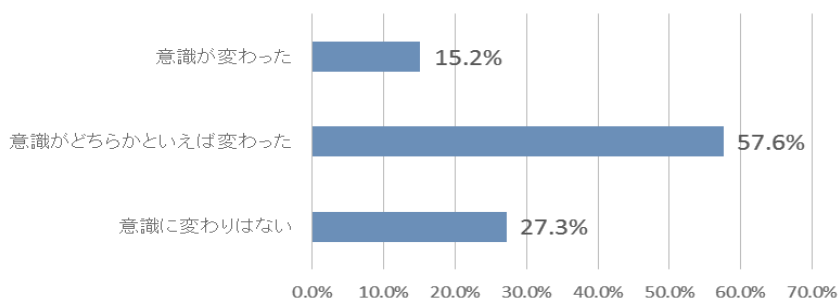


図 28 研修受講後の意識の変化 (n=137)

【職員の声】

協働研修（基礎編）（入区5年目）を受講し、協働が庁内の幅広い課に関係する身近なものであることを認識しました。「文の京」自治基本条例にあるとおり、本区において、協働は自治の理念として特に重要性が高いと思います。今後の職務の中で、適切に協働の手法が活かせるようにしたいです。（事務系職員、協働事業なし）

② 協働推進への課題

「新たな公共プロジェクト」が必要でない理由には、協働推進の一つの課題として、“担い手と区の課題とのミスマッチ”“対等な協働相手としての担い手への期待（現状では育てていない意識）”がみられます（図29）。

現状では、区の行政課題と地域の担い手をつなぐ中間支援的な調整機能が十分でないこと、担い手が協働相手として十分に育てていないこと、区職員が地域の担い手と接する機会が少ないため、担い手の状況を理解していないことが要因として考えられます。

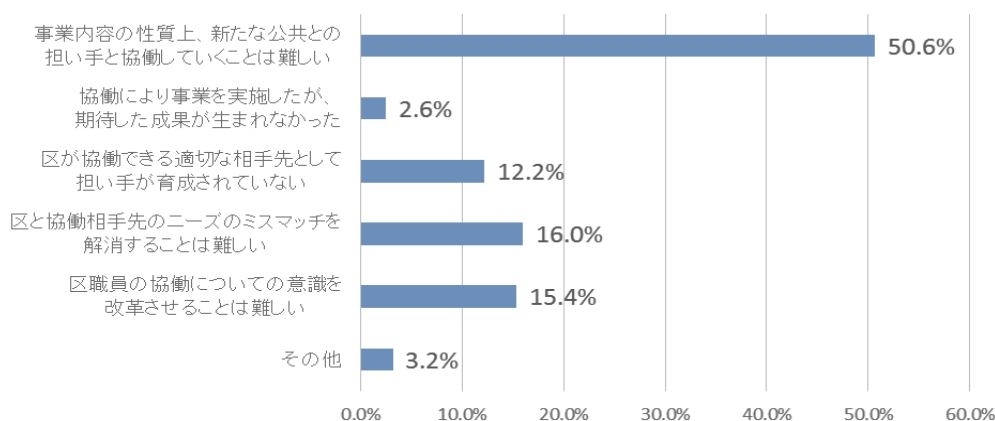


図 29 「新たな公共プロジェクト」が必要でない理由 (n=121)

【職員の声】

- ・必要性、重要性は感じますが、区とNPO等の担い手側とのニーズのミスマッチや、組織が育っていないと思います。（事務系職員、協働事業なし）
- ・区の複数部署に関わる協働のニーズに対し、区側にマッチングやコーディネートする組織・人員がない又は不足していると感じます。（事務系職員、協働事業なし）
- ・知らない人同士を「つなぐ」という意味においては、「新たな公共プロジェクト」は効果を発揮したと思いますが、胸を張って「これが文京区の協働事業の成果だ」と呼べるものがあつたらうか。また、担い手の方が区の諸問題を解決できるレベルにまでなっているか疑念が残ります。（事務系職員、協働事業担当者）
- ・区の協働と、NPO等の協働には温度差があるように感じます。それをどのように埋めていくのが課題ではないでしょうか。（事務系職員、協働事業なし）

「新たな公共プロジェクト」は、全庁に影響を広げるまでのインパクトを十分に出せたとはいえない状況です。「新たな公共プロジェクト」に対する理解や協働に対する意識の変化が起きているとはいえ、行政職員と担い手がディスカッションできる十分な場を提供してきたとはいえません。

(3) 協働推進に向けて

① 職員及び担い手の協働の学習プロセスとしての新たな公共プロジェクトの役割

職員アンケート結果等により、区職員の協働への意識の変革は、「新たな公共プロジェクト」になんらかの形で関わったかどうか」が強く影響を及ぼしていることが明確になりました。逆にいえば、協働推進委員、対話の場や「プロジェクト支援制度」への参画、研修等の「新たな公共プロジェクト」のプログラムに関わることで、地域の担い手（主体的に活動する方）の具体的な顔が見え、担い手が区内にいること、様々な人材やリソースが地域にあることを実感・確認することができ、「協働に対する理解」、「意識変革や行動変容」、「取組姿勢の向上」につながったものと思われれます。

これは、「新たな公共プロジェクト」に関わり、参画することで、職員が「協働・協治」について考え、学ぶ一つのプロセスになったといえます。対話の場や「プロジェクト支援制度」等で、区民や担い手と接することにより、担い手のことや、区とどのような協働ができるのかを具体的に考えることが可能となりました。

文京区の協働は、「文の京」自治基本条例前文に「私たちが良好な環境を維持しながら真に文化的にしあわせに暮らすためには、この地に住み、学び、活動するすべての方々が自律した存在として尊重されるとともに、守るべきもの、育むべきものを確かめ、自立した存在として、互いに合意を形成し、協力し合うことが必要と私たちは考えます。」とあるように、協働パートナーとして、区と担い手や区民が対等な関係で推進していくことを目指しています。しかし、このように概念として協働を目指していても、具体的に対等な立場での協働をイメージし、実行することは難しいものです。

また、区職員の考える枠組みの中では、どうしても区の業務の補完といった思考になるため、本当に必要とされている新しい協働事業が生まれにくい状況にあります。「新たな公共プロジェクト」で実施されたプログラムのように、担い手と直に接する機会を通じて互いを

知ること、協働の理解を促し、双方で事業を話し合いながら、真の協働へとつながっていきます。そうしたプロセスを経て、初めて、協働の成果が出てきます。

職員アンケート結果にもあるように、全職員でみると「意識が変革した」「新たな公共プロジェクトが必要だった」と回答する方は多くありません。これは、“主体的に動く担い手”が見えていないために、意識改革や協働に対する行動変化が起こせないでいるためだと考えられます。今後も、“担い手と接するような対話の場”をさらに提供していく必要があると考えます。

また、担い手や区民にとっても、対話の場や「プロジェクト支援制度」等の区職員と接する機会は、区との協働について知る機会でもありました。協働相手になるためには、どのような要件が必要で、自分のプロジェクトをどう整理し、どう見せればよいのか、区とは何を一緒に目指せばよいのか等を考える場になりました。そのようなディスカッションをすることで、それぞれの活動がステップアップしていきました。

このように「新たな公共プロジェクト」の各種プログラムは、区職員、担い手、双方にとって、“協働について学ぶ学習のプロセスの役割”を果たしていたといえます。

② 今後の協働推進のために

協働推進のための課題は、“区の行政課題と担い手の志向とのミスマッチ”や“担い手と区職員の対話の場の欠如”が考えられます。

これらの課題を解決するためには、区担当者や担い手の協働を前提とした対等な議論の場を設け、双方の理解を促し、新しい事業を一緒につくっていくプロセスが必要となります。

また、区や担い手、区民をつなげたり、調整したりする中間支援機能が、現状ではまだ十分な状況ではありません。この協働推進の調整機能については、民間のコーディネーターに加え、庁内の橋渡しが必要となります。

加えて、今後、複雑化する社会の中で、協働事業の対象となる社会課題が組織横断的なものとなる可能性も高くなってきます。実際にプロジェクト支援においても複数課が関わることもありましたが、一つの課で完結できない課題こそが、行政が対応しにくい課題であり、民間の担い手が取り組む意味もあります。そうした場合には、組織横断的な調整と組織内の体制づくりが必要となってきます。今後も、協働推進担当がその役目を引き続き担っていく必要があります。

また、こうした組織横断的な協働事業を行うことで、部課の枠を超えて事業連携をするという、業務のやり方を学ぶことができ、このプロセスもまた、区職員にとっての学びとなることが期待されます。